

柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会第17回定例会・会議録

- 1 日 時 平成16年10月5日(火)
- 1 場 所 柏崎市市民プラザ 風の部屋
- 1 出席委員 新野(議長)・浅賀・伊比・阿部・小山・中村・宮崎・川口・佐藤・  
武本・高橋・中沢・丸山・本間・渡辺(丈)・渡辺(五) 以上16名
- 1 欠席委員 今井・金子・柴野・田辺・内藤・牧・吉田・渡辺(洋) 以上8名
- 1 講演会講師 ジャーナリスト 武田 徹 氏
- 1 その他出席者 柏崎刈羽原子力発電所保安検査官事務所 木野所長  
柏崎刈羽地域担当官事務所 早川所長  
新潟県 原子力安全対策課 高橋参事・飯吉主任  
柏崎市 市民生活部 山田部長  
柏崎市 防災・原子力安全対策課 布施課長  
刈羽村 企画広報課 吉越副参事  
西山町 まちづくり推進課 徳永課長  
東京電力(株) 広報部地域共生室 長野室長  
東京電力(株) 安全担当 西田部長  
東京電力(株) 室星地域共生第一グループマネージャー  
東京電力(株) 地域共生室 杉山  
柏崎市防災・原子力安全対策課 名塚係長、桑原主任、関矢主査  
柏崎原子力広報センター 鴨下事務局長(事務局・司会)

事務局

地域の会第17回定例会を開催させていただきます。御案内のように、この17回定例会は、拡大版勉強会ということになっておりまして、講師先生をお招きしての講演会を織り込んでおります。後ほど紹介させていただきますけれども、公開講演会ということになっておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、会長、お願いいたします。

新野議長

では、第17回定例会を、これから開かせていただきます。今日はオブザーバーの方、いつもいらしていただいているんですが、その他に一般公開しています。大体今のところ月1回が定例会の開催日になっているんですが、会の冒頭に、1カ月間にあったことを、まず報告をそれぞれの場所からいただいて、本会に入るような形で定例会を進めています。今日は、せっかく講師の方をお招きしていますので、そこが長くなると、後に差し障りが出ますので、ちょっといつもより簡略化して報告をいただきます。それを御了承いただきたいと思います。

それから大体の時間配分なんですが、これから10分が15分ぐらい報告にお時間いただきまして、いつものシナリオで説明させていただくんですが、その後講師の方から、若干の時間の誤差があるかと思うんですが、約90分ぐらいお話をいただいて、その後委員を交えて質疑応答になります。その他にもし会場の方からお時間があれば、またお声がけをさせていただきますので、よろしく願いいたします。最終的には、大体9時を終了のめどとさせていただこうと思っています。延びても、9時15分を目指しますので、皆さん御協力よろしく願いいたします。

では、議事の1、前回の定例会以降の動きですけれど、新潟県の方から御報告いただきます。

高橋参事（新潟県）

新潟県原子力安全対策課の高橋でございます。お配りしている資料をごらんいただきたいと思いますが、前回臨時会9月1日以降の行政の動きということで、簡単に御説明をしたいと思います。

まず1番目でございますが、安全協定に基づく状況確認ということで、これは月例毎月やっているものでございまして、県、柏崎市、刈羽村の三者で実施してございます。確認内容といたしましては、1から7号機の運転状況等の確認ということでやらさせていただきました。

それから2番目でございますが、東京電力からの配管減肉管理状況に関する報告ということで、関西電力美浜発電所の配管破損事故、これは8月9日にあったわけですが、これに関連しまして、県では8月30日に東京電力から炭素鋼配管減肉管理状況と今後の対応ということで報告を受けてございます。また、9月30日には配管減肉が起きにくいと言われております低合金鋼この配管についても追加の報告を受けました。県としては、今後4号機の追加点検が行われるということになってございますので、この結果等を踏まえまして、必要があればさらに点検を要請するというふうなことをやっていきたいという

ふうに思っております。

それから3番目でございます。平成16年度原子力防災訓練事前訓練の実施ということで、11月1日、2日に、国と合同での原子力防災訓練がことしは実施されるわけですが、それに先立ちまして事前訓練ということで、9月28日に三和町にございます原子力防災センターで実施をいたしました。

この訓練の特徴でございますが、ブラインド訓練というぐあいに言っております、事前にシナリオ等は一切知らせないということで、適宜情報が来て、その情報に基づいてその時点でどのように判断するかというような訓練をやったということでございます。比較的いろいろな訓練ができたかなというぐあいに思っておりますが、今後本番に向けまして、またさらに検討をしていきたいというぐあいに考えてございます。

それから4点目でございますが、原子力長期計画策定会議に平山知事が出席ということで、9月28日でございますが、原子力委員会の原子力長期計画策定会議に新潟県知事の意見を聞く会というのがございまして、その席上で平山知事が原子力行政について意見を述べたということでございます。

これは、「新潟日報」等にも取り上げてございますので、お聞き及びだとは思いますが、主な論点としては2点というぐあいに聞いてございます。1点は、核燃料サイクル政策の国民的な合意形成が不十分であるというのが1点。それから安全規制体制のあり方、これについては、まだ十分検討されているとは言えないという、この2点が論点の中心だというぐあいに聞いてございます。いずれ原子力委員会の方のホームページに議事録等は掲載されるというぐあいに聞いてございますので、機会があればごらんをいただきたいというぐあいに思っております。

以上でございます。

新野議長

ありがとうございます。では、続いて東京電力さんお願いいたします。

長野室長（東京電力）

東京電力の長野です。お手元の資料の方に時系列で公表した関係の案件を記載しております。まず9月3日でございますが、これは新潟県の税金でございますが、発電所に入れる新しい燃料にかかる税金の税率が改定になっております。10%から12%ということで、これについて県さんと合意をしたということで発表しております。

16日これは作業用の分電盤、屋外のものでございますが、発煙がありましたということで公表しております。これは端子の緩みによって接触抵抗の増大で加熱して発煙したと推定しております。同じく16日に5号機の放射能濃度の測定用核種分析装置のソフトウェアに不適合の可能性があるということで調査しますという発表をいたしました。これは結果として翌日に不適合ではなくて、当社と関連企業の担当者が測定表示の仕組みをよく理解していなかったという誤認であったということで公表しております。不適合はなかったということで公表しております。

22日4号機の圧力抑制室内の点検結果を公表しております。実施した結果、折れたドリルの刃先長さ約3センチ、それからボールペン、その他消耗品類ボルト、ナット等のごみを回収いたしております。4号機については昨年異物問題が出たときに運転中でしたので、今回点検をしてこのようなものを回収したということでございます。いずれ

も小さいものでE C C S系への影響はないというふうに判断しております。

22日6号機、定期検査中の6号機でございますが、定期検査の終盤に行います格納容器の漏えい率検査を実施してございます。国の判定基準を満たしているという御確認をいただいております。

裏にまいりまして、9月27日でございますが、定期検査中の4号機で熱交換器内の点検調査の開始ということで発表しております。これは原子炉から高温水と原子炉へ戻る低温水の間で熱交換をしているものの伝導管でございますが、そこで損傷が生じたのではないかとということで調査をしているものでございます。漏水したのではないかとということで調査しております。これは、外部に原子炉水が流出する恐れのない場所でありまして、安全上は問題ないというものでございます。

9月30日これは9月1日にお知らせをいたしました、4号機のP L R配管の追加点検で見つかりました、ひびの取りかえについてです。工事計画届出を提出したということでございます。

その他でございますが、9月16日に柏崎、9月17日に刈羽村、発電所の定期説明会ということで開催をいたしております

以上でございます。

新野議長

ありがとうございます。本来でしたら、ここでまた委員からの質疑応答が一部入るんですが、今日はその時間をちょっと割かせていただきますので、ここにおいでの方の委員の方が万が一今の報告で質問等があるようでしたら、次回の11月5日まで繰り延べさせていただきますので、描きとめておいてください。

本来最初に報告するべきなんですけれど、地域の会としての前回からの動きということで、9月1日が前回の定例会でしたので、2日以降なんです、運営広報委員会の合同会議を2回開かせていただきました。前半は広報誌に関する討議をしまして、次のときもまた重ねてそれだったんですけれど...。9月28日でしたね、国の方の防災訓練がありました、そこへ急遽なんですけれど、ぜひ出させていたどうかということで、緊急召集でしたので、余り多人数出られませんでした、初めての体験をさせていただきました。

また、11月に入りましての定例会で、その詳細を報告させていただこうと思うんですが、そういうことがありましたので、あと8月の報告が一部漏れてまして、8月のときに運営・広報委員会をさせていただいた中で、とてもいい意見が出たと思うんですが、常には荒浜にあります原子力広報センターが、私たちの定例会の場所になっているんですけれど、とても広域を本来カバーしている会として、刈羽・西山が入るわけですね。いつもその場所が地とすると、柏崎市に入りますので、たまには出張の議論をしたらどうかという一部委員の中から意見が出まして、たしか運営・広報委員の中でもそれはいい考えであるということで、前向きに検討したいというふうに運営・広報委員会の中ではなっていたんですけれど、一般委員さんとまだ協議はしていないんですが、そういう姿勢でできる限り、多分年を越えてしまうかもしれないんですが、それをぜひ実現したいというふうに思っていますので、また11月以降の会でこの件に関しては継続的に協議させていただきたいと思っております。

では、今日は、先ほど申し上げましたとおり、拡大勉強会ということで、武田先生の方

からお話を伺うんですが、これは私たちが常日ごろしています活動の中で、この委員に選ばれた経緯とかいろんな問題がありまして、情報量とかいろんな意味で均一の委員でないんですね。いろんな立場でまたそれはそれで非常に貴重なんですけど、せっかく選ばれたんだから、多少の勉強もして地道な活動をしていくべきじゃないかというような今年度の新たな視点を踏まえまして、隔月で勉強会を重ねていってはどうかという提案の中の一つなんです。今日お招きしている講師の方が、これから実際現実的に何をお話いただくのかは、まだ私も承知していないんですけど、その中でまたここは狭い地域ですが、その地域でないところで、またいろんなふうに住生活されたり、お仕事されたり、考えられたりしている方をまた招いてここでお話を伺うことによって、その中身を全部受け入れるということじゃなく、それをまたヒントに私たちもよりよい柔軟性を持って新たな視点の考えをお聞きした上で、それがまたどういうふうはこの会に反映されるかなというような活動に繋げていきたいと思っています。そういう視点でその内容を全部キャッチして、それを私たちが反映しようとしているんでないということだけ御承知おきいただいて、またお話をちょうど前向きに聞いていただいて、この先の活動のプラスに繋げていきたいなと願っていますので、皆さんもよろしくお願いいたします。

それからもう一点、委員の中に配られていますオブザーバーの方にも行っているかと思うんですが、地域の会原子力総合防災事前訓練概要という1枚の紙があるんですが、それは9月28日の概要ですが。その後には本番であります11月1日、2日に原子力防災訓練が国レベルで柏崎市、この辺の地域では初めて行われる全国的訓練というのがあるわけですけど、全国的というか国が主導された訓練があるんですが、それにもぜひ立ち合わせていただくということに前々からなっているんですが、1日は行政側の訓練が主でして、時間的には終日というふうにお聞きしています。濃い状況で1日があるんじゃないかと、私たちの側からするとかなり緩慢な時間の流れかなというふうに思うんですが、2日は住民参加訓練が主体になりますので、これは、朝から1時ぐらいまでの半日の活動になるかと思います。これが月曜、火曜になるんだと思うので、全く平日なので委員の方もお仕事をされている方が多いので、なかなか難しいとは思いますが、参画するとなると、ただ、ぽっとそこへ行って見るというのではちょっともったいないなと思います。その流れの詳細がまだはっきりしてないんですが、どこで何が行われるかがある程度わかってから、委員の中のどなたが参加できるのかというのを踏まえた上で、どのような参画の仕方をして、どういう方法で見学させていただいたらいいのかということ一度練らなきゃならないと思います。次の会には防災だけのために1回定例会をとっていますので、そこでの議論に反映させるために、事前に今月の半ばぐらいまでに1日に参加される方は大体終日なんですが、要するに3時以降ならばいいよとか、可能な時間帯を書いていただいて、参加の状況を事務局の方に知らせていただきたいと思いますと思うんですが。

それで2日目は半日、午前ですね。これも活動場所は西山・刈羽・柏崎の中でも何カ所にもわたって行われますので、できるだけ大勢の方に参加していただきたいんですけど、事前の打ち合わせを全体会で一度本来ならばやるべきかとは思いますが、月一で集まっていたのに、今度月二、三とかとなりますので、この場でもう一度20日過ぎごろに全体会を開くことがいいのか、運営・広報委員あたりに委任していただけるのか、ちょっと意思表示いただくとありがたいんですが、いかがでしょうか。

本当なら全体会を開いてどういう訓練がされるのかを承知して、ある部分を見ていただくという方が万全ではあるんですけど、時間的なことがあるので、もしそれを希望されないのなら、また別の考えを入れますが。

この多分20日ごろには、この日程のもう少し具体的なのが上がりますので、それを、運営・広報委員に一任いただくか、あとは出られる方にお声がけして集まっていただくかという方法でよろしいでしょうか。

(全委員 了承)

11月5日に次の定例会を予定しています。それは防災1本で行こうと思っていますので、参画できない方はその前後で御自分の考えなり、お近くの方とまた意思の交換をされて、そのときに何かこういうふうに取り組んだらいいだろうとか、いろんな結果もいろんなところから目にすると思うんですが、そういうことで何か別の形の意見をいろいろ聴取していただきたいと思います。では、お時間いただきましたが。

よろしいですか。では、講師の紹介いただいて、早速講演に。

事務局

それでは、今日の講演「原子力・原発問題の歴史を展望する」講師、ジャーナリスト武田徹さんを御紹介させていただきます。1958年生まれ、ICU国際基督教大学大学院を卒業されて、ジャーナリスト、ノンフィクション作家として活躍されておられる方です。一方で、法政大学を初めとした幾つかの大学、それから2003年より東京大学先端科学流通研究センターここで特任教授として、科学ジャーナリスト養成コースの教授を兼務されております。

武田さんのホームページを持っておられまして、この中で、改めて痛感する、核は厄介だったというようなことを仰っておられますけれども、これは「核論」という主著の解説なんでもございますが、この核をというのは原子力、原発問題のみならず核兵器とか地続きの問題として核を幅広くとらえているわけですが、私どもからすれば、この原子力・原発問題と問題が重なっているかと思いますが、この改めて痛感する原子力・原発は厄介だったという部分、これは私ども原子力・原発立地地域住民として日々痛感しているところでございます。この辺を武田さん、一流の鋭い問題意識で解いて、私どもの進むべき方向を提示してくださるのではないかと思います。よろしく願いいたします。武田さん、お願いいたします。

武田徹氏(ジャーナリスト)

初めまして武田です。よろしく願いします。見てのとおり若輩者でございますので、お手柔らかにお願いします。

今御紹介いただきまして、こういう機会にお話しさせていただく、そういうチャンスをいただきまして、とても光栄に感じております。ただ、光栄に感じているのと一方で、戸惑いも同時に感じておりまして、そのあたりのことを少しお話しして始めたいなというふうに思います。

今御紹介いただいた中にもあったんですが、「核論」という本を出したんです。2002年の秋だったんですが、原子力の核という字をとりまして「核論」というふうなタイトルをつけた本だったんですね。この本がきっかけになって今日ここでお話をさせていただくことになったと思うんですが、私は決して原子力の専門家ではございません。「核論」

というのは、一つの原子力技術の受容の本として出しましたけれども、その一つ前の私の単行本は、「隔離という病」というタイトルでございまして、これはハンセン病の医療史なんですね。そのさらに1個前は「偽満州国論」というのを出してございまして、これは満州国の話です。満州国、ハンセン病、原子力と全然関係ないだろうというふうに思われると思うんですよね。さらに、私のパブリックイメージを混乱させるのは、今言った3冊というのは、描きおろしの本でございまして、私は今大学からお給料をいただいていますけれども、基本的に、原稿料で生活をしてございまして、新聞とか雑誌に記事を書いて、そこで原稿料をいただくというそういう生活スタイルなんですね。雑誌とか新聞に書く記事というのは、原子力とかハンセン病とかそういうものではなくて、むしろ今の流行現象とかの分析が多いんですよ。例えば携帯電話がどういうふうに若い人に使われているとかを調べて書いたりしているのが、雑誌とか新聞の世界での私の仕事でありまして、前にサントリー学芸賞というのをいただいたことがあるのですが、それも「流行人類学クロニクル」というタイトルの本でございまして、これはまさに90年代の流行現象の分析の本だったんです。そういう今のことを分析している。一方では満州国をやったり、ハンセン病の隔離医療史をやったり、歴史のこともやっている。ここもよくわからないというふうによく言われるんですね。

ただ、確かに分析する対象というのは、どんどん変わっていくんですが、私は個人的には一貫性があるというか、逆に一つの仕事しかしていないという、そういう気持ちすら持っているところがございまして、このことは後で今日少しお話をしようと思うんですけれども、私は公共性と共同性という二つの社会の中の軸をメディアとか、文化イメージとのかかわり合いで考えていくという、そういう仕事をずっとしてきているんですね。そういう分析の仕方を現在に適応すれば、今の流行現象の分析になりますし、過去に適応したというのが満州国の話であったり、ハンセン病の隔離医療史になってきたという、そういう事情がございまして。

そういう意味で言いますと、傍から言われるほどは目先をどんどん変えて仕事をしてきているわけではないというそういう自負はあるんですが、ただ、一方でやはり今日こういうような場で、「核論」についてお話をすると申しますと、やはり原子力の専門家ではないかというふうに思われると困る。私は決して原子力は専門ではございませぬ。原子力の技術受容をテーマにして、先ほど申しましたような公共性と共同性の問題というのを考えようとしたという、そういういきさつでございまして、余り立ち入った話というか、皆さんの方が恐らく私よりも原子力の具体的な事実関係に関しては、お詳しいと思いますので、私はちょっと違う視点から原子力を論じたという、そういう立場で今日はお話をさせていただくという、そこをあらかじめお断りしておきたいなというふうに思っているんです。

以上が、前置きなんですけれども、その「核論」なんですが、ここに描きましたが、文化史・社会史と言われるようなカテゴリーに属する本だというふうに思っただけであればいいと思います。それは、その前のハンセン病の話や満州国に関しても、私は社会史とか文化史の方法論でアプローチしたんですが、一貫してそういうスタイルでやってきてございまして、何で原子力をテーマにしてそういう社会史とか文化史の方法論を適用したかということなんですが、ハンセン病の隔離医療史の隔離医療という技術、科学技術ですよ、それを社会がどういうふうにか受容したのか、それを調べることによって、ある種日本の近

代化の質を考えるとというそういう作業をしたんですが、この「核論」というのも同じ手法でございまして、議論の対象となる科学技術が今回は隔離医療ではなくて原子力技術だったわけですね。原子力技術をいかに日本社会が受容したか、あるいは拒絶したかということを考えていくことによって、日本の社会の質を考えていこう、日本の社会の中に公共性と共同性の問題がいかにこう緊張関係を持ってあり得たかということを考えていこうという作業をしたんですね。

もし、この「核論」というのが、皆様方に何らかの考えるヒントになるんだとすれば、やはり大衆的な価値観が原子力をめぐってどういうふうに成立してきたのか、あるいは原子力という科学技術がどういうイメージを形成してきたのか、そういったあたりを考えることがやはり重要なのではないかという、そういう問題提起を私の方からはしたいと思うんですね。

言わずもがなの話なんですけど、民主主義の政権においては、科学技術の大衆的な受容形態のいかんが当然政策決定にも影響し、科学技術社会の未来をも決定する、これは当たり前前の話ですよ。となりますと、大衆社会がどういうふうに、その科学技術に対して価値観を持ったのか、どういうイメージを持ったのか、これは専門家の方が持っているイメージとは違うと思うんですね。違うことがあり得ると思うんです。でも、大衆的な価値観、大衆的なイメージ形成みたいなものを見ていかないと、やはり科学技術が社会に受容されるかされないかというそういう非常にクリティカルな時期になってきますと、議論ができなくなってくるところがあると思うんですよ。科学技術としての原子力だけではなくて、やはり社会の中の原子力というか、文化としての原子力というこういうものを把握しておく必要が、日本の原子力を考える上では必要なのではないかなと私は思っているんですね。そういう気持ちも踏まえて「核論」というのは描きましたので、今日はそういったあたりの問題意識でお話ができればいいなと思っております。

先ほど、最初にお断りをしたときにちょっと言い忘れたんですが、とても大事なことなんですけれども、「核論」というのは、私の自分自身の気持ちとしては、実は終わっていない本だというふうに思っております。偽満州国論、隔離という病という2冊がその前にあると申しました。3冊目でその公共性と共同性と議論というのは終わらせようと思ったんですが、先ほど御紹介のときにもおっしゃっていただきましたけれども、やはり原子力というのは、とても強敵でございまして、原子力を切り口にして日本社会のある種の公共性論みたいなものをやろうと思ったんですが、とてもじゃないけれど終わらなかったという、そういう実感がございます。

今日は、まさにその終わらなかった未解決のまま残してしまった問題というのを皆さんと、皆さんの意見を聞きながら、少し自分なりにブラッシュアップしたいというふうに思っておりますので、できれば後段の議論の時間を長めにとれるようにお話をしていきたいなというふうにも思っております。そういう心づもりでおりますので、一つよろしく願います。

大体こんなことを話してみようと思っております。前半は、原子力技術受容の初期状況、1950年代の状況ですね。これを文化史・社会史の手法で顧みてみる。これは「核論」の中の2章分ぐらいに当たるんですが、そういう作業をしてみようと思っております。



後半は、その作業を踏まえて、科学技術に向き合う姿勢を改めてもう一度考えてみるという、そういう試みに挑戦してみようと思っております。こういう2階立て構造でお話をさせていただきたいなというふうに思っております。

最初の日本の原子力技術受容の初期状況についての議論に移りたいんですが、原子力技術受容の初期において広く影響力を持った大衆的な文化、あるいは大衆的な訴求力を持った作品にいかにか原子力が描かれていたか、こういうのを見ていくことによって当時の原子力に対するイメージ、あるいはより広く科学技術に対して大衆社会がどういうふうに距離をとろうと思ったか、どういうふうに向かい合おうとしたのか、そういうことを考えてみるような作業を「核論」ではしております。今日は、その中の幾つかの事例を挙げてみようというふうに思うんですね。

それで、御紹介するのは、やはり皆さんが知っている作品の方がいいと思いますので、言わずもがなの日本の国民的なクリエイターと言っていいと思うんですが、手塚治虫の作品を取り上げてお話をしてみようかなというふうに思っております。手塚さんは、戦争中から自分でわら半紙に漫画を描きためていた非常にたくさんの作品を当時から書いていたようですけれども、本格的にデビューするのは戦後になってからですよ。デビューしてから余り時間がたたないころなんですけれども、後に手塚治虫の作品について批評するような方がSF三部作と呼ぶようなそういう作品があるんです。作品名としては「ロストワールド」、「メトロポリス」、「来るべき世界」という三つのタイトルなんですが、SFというふうに後に言われることになるような科学技術を使った社会、科学技術に依存している社会、未来社会を描いた作品でございます。

それぞれ1950年前後というふうに考えていいと思うんですが、もう既に冷戦が始まっている時期ですよ。そういう冷戦構造に対する悲観的な評価があるというふうにここ（資料）に描きましたが、かなりこれらは暗い作品です。今は手塚治虫全集みたいなものが比較的簡単に手に入りますので、あるいは図書館などにありますので、もし御興味があったら見ていただきたいなと思うんですけれども、二大超大国がやはり核兵器的かなり強力な最終兵器を持って、にらみ合うようなそういう状況が舞台になっているんですね。もう一度戦争が起きてしまえば、世界が滅びてしまいかねない、人類が滅びてしまいかねない、そういう状況を描いている作品でございます。

この中に、原子力というのが当然出てくるんですけれども、この場合に、原子力というのは核兵器にしか使われていないんですね。核兵器の原子力と言えば核兵器という、そういう使い方で原子力というのは、この手塚治虫の初期SF三部作に登場します。この初期SF三部作の後に手塚治虫が描くのが、皆さんも御承知の「鉄腕アトム」という作品になっていくんですね。このあたりは、少し細かく御説明した方がいいと思うんですが、「鉄腕アトム」というのは、実は最初に手塚治虫が描こうと思った作品ではないんですね。先ほどのSF三部作と呼ばれる作品があって、ある種近未来科学技術漫画みたいなものを手塚治虫というのは、自分の得意としておまして、そういう作品をもう一本書こうと思った。光文社という今でもある出版社ですけれども、「少年」という雑誌があって、その編集者の金井さんという方なんですが、この方と次にこういう作品を描きたい、金井さんの方もこういう作品を書いてくれという、そういうやりとりをする時期があるんですね。1950年ぐらいです。そのときの記録というのは、幾つかの文献にも残っているんです

が、手塚治虫は光文社の編集者に対して「アトム大陸」という、そういう作品を描きたいんだというふうに、そういうふうに述べたという、そういう記録が残っております。

この「アトム大陸」というのは、先ほどまでのSF三部作と違って、原子力の平和利用なんですね。原子力の平和利用によって非常に豊富なエネルギーを得て、豊かになったという国が舞台になっているという、そういう作品です。だから、この初期のSF三部作と、この「アトム大陸」というのは、かなり質的に違う作品なんですね。手塚治虫は今度は核兵器ではなくて、原子力平和利用といいますか、具体的なことまでは企画書には書いていないのでよくわからないんですけども、原子力発電的なものと、例えば言っているのかもしれない。そういうような力を使って豊かになっている未来社会というのを描きたいと、そういうことを編集者に語ったという記録は残っております。

編集者の方も手塚治虫の企画意図を了承して、実際に1951年になってから連載をしようというふうに話がまとまるんですね。話がまとまったのはいいんですが、手塚治虫は描けないんですよ。なかなか描けない。非常に苦しむんですね。苦しんだあげくに、もう連載時期が決まっていますので、もうここで原稿を描かないと連載が始まらないということで、やけになった、自暴自棄になって描いたと自分でも書いているんですが、「アトム大陸」というタイトルとは違う「アトム大使」という作品を、手塚治虫は1951年の「少年」という雑誌に描きます。これが皆さんが御承知の「鉄腕アトム」に後につながっていくんですね。この時点では手塚治虫は「アトム大使」という単発の作品を描こうとしていたようです。「アトム大使」で完結して、そこで終わるといふ、そういう思惑で書いていたものでありまして、それが非常に人気が出てしまったので、後にシリーズ化されて、皆さんが御存知の「鉄腕アトム」につながっていくというそういう経緯をたどった作品なんなんですが、「鉄腕アトム」の最初の作品は「アトム大使」というそういうタイトルでした。あくまでも単発として出されたというものでした。

ここに一つ画像をお見せしておりますけれども、これは「少年」そのものではなくて、後に「鉄腕アトム」が光文社からカップコミックスシリーズとして出されたときのものなんですね。これは私子供のころに家でとっていたんですね。とるといふのは今はちょっと想像はしにくいんですけども、書店の人が発売日になると持ってきてくれるんですよ。だから、昔は酒屋さんとかああいうのと近いような形で書店の人もその地域を周っていて、だから、このカップコミックスシリーズが出たら持ってきてねみたいなことで、家で言っていたんですね。毎月発売日になると家に届けられて、僕は姉がいるんですけども、姉と奪い合って読んだ記憶があります。小さいころの話なんですけれども、そのカップコミックスシリーズの連載順に忠実にこれは出ておりまして、「アトム大使」というのは、その第1巻だったんですね。最初の巻だったんです。

ちょっと余談になりますけれども、手塚治虫というのは、かなり描き直す人なんですね。このカップコミックス版の「鉄腕アトム」の第1巻「アトム大使」と「少年」連載時の「アトム大使」は微妙に違ってまして、さらに講談社版の全集は終わり方が全然違うとか、何かいろいろ版によって違いがありまして、後の研究者を非常に悩ませるところがあるんですが、私はこのカップコミックス版の「アトム大使」を使って、今日は議論をしようと思っております。

毎月このカップコミックス版のアトムシリーズが届けられるのが楽しみにしていたとい

うふうに申しました。ただ、楽しみにするようになったのは、後のころの話でありまして、子供心ながらにこの「アトム大使」の巻というのは、余り印象がよくなかったんですよね。わからなかったんだと思います。そのわからなかった理由をこれから御説明しようと思うんですが。

手塚治虫は先ほど連載開始時期が迫ってしまって、やけになって「アトム大使」という作品を投げつけるように描いたというふうに申しました。でも、それはやっぱり手塚治虫というのは、私はやっぱり天才肌の人だなと思うんですけれども、やけになったとは思えないぐらい、かなり複雑なストーリーを「アトム大使」という物語は持っております。もしかしたら、後の鉄腕アトムシリーズよりも作品としての完成度は高いかもしれないですね。そういう完成度の高い作品を、やけになって描けてしまうところが手塚治虫の天才たるところだと思うんですが。

少しその内容について御説明しようと思います。ここ（資料）で鏡像関係というふうに描きました。どういうことかと申しますと「アトム大使」という作品の中では、宇宙人が出てくるんですね。宇宙人が自分の住む星が爆発してしまって、もう住むところがなくなってしまって、宇宙船に乗って宇宙を漂流していたんですよ。すごい大きな宇宙船ですよ。その星の全部の人口を乗せて漂流するような宇宙船があって、その宇宙船が地球に漂着していると。その宇宙人は最初は地球人に気づかれないように、山の奥で隠れて生活していたんだけど、その中の子供が一人その宇宙船の周辺で隠れた生活をしていた地域から出てしまって、地球人の暮らす町に行ってしまうと。町に行ってしまうと、地球人の人さらいに会ってサーカスに売られてしまうとか、そういう描き出しなんです。おもしろいのは、ここで鏡像関係というふうに言いましたけれども、ちょっと（資料が）見えにくいかもしれませんが、この子が最初に地球人の社会に出てしまった宇宙人なんです。これは教室の風景なんです。サーカスに売られてしまったから、そこから脱出して、小学校に行っているんですね。小学校に行っているんですが、ひげおやじが先生ですね、小学校のね。大野玉男君というふうに呼ぶと、はいというふうに答えていますね。その隣にもう一人いるでしょう。こっちが地球人の玉男君なんです。

この「アトム大使」シリーズのおもしろさは、その宇宙人と地球人が完全に一対一に対応しているという、そういう設定なんです。地球人に玉男君がいれば、宇宙人にも玉男君がいる。そういう物語構造なんです。これがひげおやじですね、これ別のところからとりましたけれども、ひげおやじという人も宇宙人で同じ人がいるんです。けしからん、わしが2人いるなんて言っていますね。なるほどひげの数まで同じだわいなんて言っているという、こういう宇宙人と地球人が一対一に対応しているという舞台設定なんです。こういう思いつきをするところが手塚治虫らしいなというふうに思うんですが、こういうふうな設定をすることによって、宇宙人と地球人が同じであるということを前提として、逆に宇宙人と地球人の微妙な違いというのが際立ってくるという物語設定になっています。

それで、特徴として相似と差異というふうに書きましたが、宇宙人の方が耳が大きいんですね。さっき玉男君のところでも説明しましたが、耳が大きいんですよ。ひげおやじもこっちの方が宇宙人なんです。宇宙人の方が耳が大きい。お茶の水博士はちょっと髪型のせいで見えませんが、この人も耳が本当は大きいはずなんです。これは、漫画を描き分ける上で、キャラクターを描き分ける上で、外見上の特徴がないと宇宙人と地球

人の区別がつきませんから、ある意味で仕方なくこういうふうになったという考え方もできますが、実はそんな簡単なことではなくて、手塚治虫本人は多分ひそかにこれは意識的にやったと思うんですが、手塚治虫の作品の中で耳が大きいキャラクターというのは、特徴があるんですね。耳が大きいキャラクターというのは非常に無垢な存在なんです。この物語の中でもそうであります、宇宙人は肉食をしないんですね。さっき漂着をした宇宙船の中で隠れて暮らしていたというふうに言いましたが、そういうことができたのも食料を外部からとらずに、どういう形なのかわかりませんが、空気の中から食べ物をつくって食べているという設定なんですね。漫画ですから、ちょっと漫画チックな設定になっておりますけれども、そういう意味で、食物連鎖から離れている、肉食をしない無垢な存在として宇宙人が設定されているというのが、この鏡像関係上の違いとして、むしろそこで際立ってくる個性なんですね。

この肉食をしない宇宙人がやがて肉食を覚えるんですね。それは地球人に教えられるんです。それはキリスト教の失樂園ではないですけども、罪を知っていくことになっていくんですが、そういう物語展開をするんですけども、実際に肉食を宇宙人がするようになってくると、宇宙人と地球人というのは一対一に対応していますから、突然地球上の人口が2倍になるようなものでございまして、食料が危機に瀕するわけですよ。宇宙人が来たおかげで、食料がなくなるかもしれないというそういう危機感が地球全体を覆っていくという、そういう設定になっております。

そこで、物語をころがす役目を果たすのが、天馬博士というマッドサイエンティスト的な学者が出てくるんですね。鉄腕アトムシリーズを少しでも見た方は多分御存じのキャラクターだと思うんですが、天馬博士というのは、鉄腕アトムをつくった科学者ですよ。生みの親ですよ。お茶の水博士というのは、ある意味は育ての親というか、後に鉄腕アトムの面倒を見ることにはなりますが、創ったのは天馬博士という科学者なんですね。天馬博士はどうしてアトムをつくったかということ、これもアトムシリーズに引き継がれることになるアトム誕生のエピソードなんですけど、トビオ君という子供がいたんですね、自分に。そのトビオ君という男の子が、交通事故で死んじゃうんですね。その自分の息子を亡くした、その悲しみの中で天馬博士は、自分の科学力を使って、自分の亡くした息子そっくりのロボットをつくるという、それがアトムであったというそういう設定がこの「アトム大使」の物語の中では出てきますし、これは後の鉄腕アトムシリーズに引き継がれる設定であります。

地球人の天馬博士は、死んだ息子の身代わりになる人型の非常に精巧なロボットをつくったんですね。ここも先ほどの鏡像構造、鏡に写し合ったように一対一に対応しているんですけども、対応しない部分が幾つかあるというその一つにつながってくるんですが、宇宙人の天馬博士はやはり同じように息子を亡くしてはいるんですけども、ロボットを創っていないんですね。宇宙人の天馬博士は、アトムを創らずに、細胞収縮液という薬品をつくっているんですよ。細胞収縮液というのは、どういうメカニズムか、それもちょっと漫画ですから詳しくは書いていませんけれども、振りかけると細胞が無限に小さくなってしまっ、消えてしまう。要するに殺人兵器ですよ。振りかけられると人間もどんどん小さくなってしまっ、死んでしまう。そういうある意味で、人を殺すことができるようなものをアトムのかわりに創っているんです。

この「アトム大使」の物語というのは、今言ったようなお話だったんですが、ここで注目すべきなのは、やはり科学技術に対する考え方だと思うんです。地球人の天馬博士はアトムを創っていた。後に宇宙人と地球人の間で戦いが起きるんですね。限られた食料を奪い合うことによって戦争が始まる。地球人の方が宇宙人排斥運動を始めるんですね。その宇宙人排斥運動を始めるときに、地球人の天馬博士、ちょっとごめんなさいね、複雑で。地球人の天馬博士が、宇宙人の天馬博士からその細胞収縮液と言うのを奪って、その細胞収縮液を使って宇宙人をどんどん殺していくという、そういう物語になっていきます。かなり悲劇的な状況になるんですね。やられっ放しの宇宙人の方も、反撃をしようとする。かなり緊張感が高まっていく。共倒れになりかねないような状況になっていくんですが、その宇宙人と地球人の間に立って、宇宙人でもない地球人でもないアトムが、間に立って和解工作をする。調停のために努力するというそういう物語が「アトム大使」なんです。そういうストーリーであるがゆえに「アトム大使」というそういうタイトルがついたと思うんですが、地球側からの代表者としてある種、大使として宇宙人側と交渉するというそういう話です。

この物語に対して注目すべきなのは、先ほど申しましたように、科学技術がどういうふうに描かれているかということなんですね。「アトム大陸」のときには、原子力平和利用を描きたいというふうに手塚治虫は語っております。「アトム大陸」が描けなくて、「アトム大使」になったわけですから、ある意味では連続性はあると思っていいと思うんですね。恐らくアトムというのは、非常に大活躍をするので、そのエネルギー源は多分原子力であろうと想像はつきます。ただ、具体的には原子力についての言及はありません。そこはちょっと物足りないところなんですが、ただ、恐らく原子力であったであろうと考えてよいと思います。アトムも原子力によって動いているというふうに考えていいと思うんですね。そういうアトムがある意味で地球人と宇宙人の間に立って犠牲的に働くということですね。

そこを考えていくとアトムというのは、やっぱり科学技術をよく使った例として「アトム大使」の中では描かれている。そして鏡像関係をなすというふうに申しましたが、アトムと写し合うような形でつくられた細胞収縮液というのが、これが科学技術の悪用としての例、ここである意味で鏡に写し合う関係ができていくと思うんですね。鏡に写し合うことによって、ある種科学技術の両義性といいますか、科学技術というのは使い方によっては、善用もできるし悪用もできるという、そういう両義性を漫画の世界の中でかなり明確に描き出した作品だというふうに言っていいと思うんです。

これは、皆さんにはちょっと知っておいていただきたいと思うんですけれども、手塚治虫というのは、後に国民的な漫画家、国民的なアニメクリエイターと言われてきて、ヒューマニズムの作家であるとか、そう思われてきているところがあると思うんですが、実は手塚治虫というのはかなり人間に対して悲観的な見方をしていた作家であるというふうに思います。歴史的・社会的情勢の困難な自覚があったと資料では書いてありますけれども、どういうことかと言うと、こういうことなんですね。実は「アトム大陸」ですね。最初にこう原子力平和利用で豊かになった国の話を描きたいというふうに手塚治虫は言っていたというふうに申しましたが、これは豊かになった国の話なんだけれども、そこに住む人間は決して豊かになっていないんですね。どういうことかと言うと、「アトム大陸」の中で

もロボットが出てくる設定でした。企画書ではそうになっていました。何が起きているかという、人間がロボットをこき使うというか、奴隷のように使う、ロボットはそこで非常に苦しむし、悲しむし、悩む、人間とロボットが和解できないという、そういうことを描く作品だったんですね。

「アトム大使」にも実はそういう構造というのは引き継がれていて、先ほどアトムが宇宙人と地球人の間に立って、大使役を果たすと言いましたけれども、決してアトムは地球人に理解を得ているわけではないんですよ。本当に自己献身的に宇宙人と地球人とともに良かれと思って活躍するという、そういう存在として登場します。そういう物語を書く背景にある手塚治虫の人間観というのは、人間というのは、やはりこう差別したり排除したり迫害する種なんだという、そういう理解があったんだと思います。人間は人間と似ていながら人間ではないもの、アトムの物語の場合にはロボットですよ。それ以外にもやっぱり宇宙人であったりとか、いろんな形があるんですけども、人間とある程度意思の疎通ができるんだけれども、人間ではないものが互いにこう差別しあって、人間がそういうもの、そういう人間と似ながら否なるものを排除していく、迫害していくというそういう物語設定は「アトム大陸」、「アトム大使」もそうでしたし、後一貫して手塚治虫作品にはあるんですね。鉄腕アトムシリーズですら、国民的な人気を博した非常にヒューマニズムな作品というふうに言われることが多い、実は人間というのは差別し排除し迫害する種だという、そういう人間理解があります。手塚治虫というのは、楽観的な未来をいつも夢見ていたわけではなくて、かなり悲観的な世界観、歴史観を持った作家だったというふうに言っていると思います。

ただ、そういう手塚治虫が、この「アトム大使」という作品の中では、罪にまみれた人間という意識を持ちつつも、科学を悪用も善用もし得るものだというふうに、そういうふう描いた、ここはやっぱりポイントだと思うんですね。「アトム大使」は1951年の作品ですけども、手塚治虫はその時点で科学技術というものは悪用も善用もし得るものとして描いた。さらに、その「アトム大使」というのが、かなり人気を博して、後に鉄腕アトムシリーズが描き続けられるようなそういうその最初の作品になったということは、こういう手塚治虫の科学技術観というのがある意味で大衆的に受容し得た、受容され得た、そういうことを物語っているのではないかと思うんですよ。

ここでちょっと余談めいて資料に描きましたけれども、丸山真男氏が随分後になったんですけども、我々は核兵器の思想化というのをやらなかったと言っているところが、鶴見俊介さんとの対談との中であったんですけども、どうも私「アトム大使」という作品というのは、大衆レベルにおいて、核技術、原子力技術というものを考えようとした、ある意味は大衆レベルでそれを思想化しようとしたような、そういうことを試みた、もちろん漫画ですから、哲学書として書いたわけではないですから、非常に素朴なものだったかもしれないけれども、科学技術、特に原子力のような非常に強力な技術に対して向き合っていて、その価値、その意味を考えようとした、そういう試みの作品だったのではないかなというふうに思うんですね。そういう意味合いで、日本の科学技術受容、原子力技術受容を考えるときの一つのメルクマールになる作品ではないかなというふうに思います。

次に取り上げるのは「ゴジラ」です。これも皆さん御存じの作品ですので、ちょうどいいかなというふうに思って御紹介します。鉄腕アトムは1951年でしたけれども、最初

のゴジラは1954年ですね。今年ちょうど50周年になります。これで最後のゴジラになると言われる作品が今創られております。皆さんのゴジラのイメージというのは、多分シリーズ化されたゴジラの作品の後半の方のものがイメージとしてあると思うんですよ。ある種子供だましのとか、かぶりものをかぶった、とても子供じみた特撮技術で、ハリウッド映画には比べようもないような非常に素朴な特撮技術によってつくられている、ある意味では世界レベルに達しないような特撮映画、しかも怪獣が互いにこう戦い合うような、そういう子供じみた作品というイメージがあるかもしれません。けれども、1954年の最初のゴジラというのは、そういう後のゴジラシリーズとはかなり異質の作品だったんですね。つくられ始めたのは、第五福竜丸の被ばく事故、被ばく事件だったんですね。水爆実験により巨大化した生物の物語というのを、第五福竜丸の1件を聞いたプロデューサーが思いつくということから創られたのが、最初のゴジラでした。

1954年版のゴジラは今でもレンタルビデオなどでは見ることができますので、実際にごらんになっていただくとおわかりになるとは思いますけれども、とてつもなく暗い作品ですね。白黒だという事情もあるんですけども、それだけではなくて、とても暗い作品になっています。そこで何で暗くなっているかということ、第2次大戦から10年弱ですよ。明らかに戦争の記憶がよみがえっているんですよ。過去の戦争の記憶がよみがえる。そして来るべき未来の戦争に対する恐怖心が喚起されるという、そういう作品になっているんだと思います。評論家の川本三郎さんは「ゴジラはまた起こるかもしれない戦争への不安とかつてあった戦争の記憶の二つに挟撃された」一種の「戦間映画」であるというふうに書いていますね。二つの戦争の間に位置づけられる映画である、と。

確かに作品の中にはこんなセリフもあるんですね。ゴジラによって瓦礫の山になってしまった東京、その中を逃げ惑う女性が「わたしは長崎の原爆にも生き延びたのに、今度はこんなことになってしまったわ！」と言う、明らかに長崎の原爆とゴジラというものを連続して考える、一つのつながりとして考えるようなそういう発想が最初のゴジラの物語にはあります。

1954年、今年で50年目というふうに申しましたが、今年で50年目になるのはゴジラだけではなくて自衛隊も今年で50年目ですよ。自衛隊というふうには名乗っていませんけれども、防衛隊というふうな名前になっていますけれども、その防衛隊というのがゴジラと戦うんですね。ただ、余りにも無力で全然役に立たないんですけども、そういったあたりのある種本土決戦といえますか、外から敵が襲ってきて、それに対して自分の国の軍隊は全然役に立たない。本土を襲撃されるままになっているわけで、戦争を思い出させて、映画評論家の双葉十三郎さんという方は「空想を空想として楽しめず、薄暗い嫌な印象が残る」という、そんなコメントを当時書いていたぐらい暗い作品だったんですね。

ただ、このゴジラという作品も科学技術を考える上では、最初のアトム作品であったアトム大使と同じように何一つ傾聴すべき意見、あるいは注目すべきポイントがあるんだと思います。設定としてはゴジラはアメリカの水爆実験によって目覚め、巨大化した古代の恐竜であるという、そういう設定でした。そういう設定である以上、核兵器ではゴジラは倒せないんですよ。ゴジラは水爆実験ですら生き延びてしまった、むしろ巨大化して凶暴になってしまった。そういう怪獣ですから、ゴジラは水爆ではやっつけられないとい

う、舞台設定になっています。そういうゴジラをどうやってやっつけるかということですよ。

先ほど申しましたように、自衛隊のある種のメタファーになっている防衛隊というのは、全く無力であったと。そういう状況の中で、一つだけゴジラをやっつけられそうな、ゴジラを倒すことができそうな兵器というのが物語の中では登場してくるんですね。オキシゲン・デストロイヤーと名づけられている、そういうものが登場します。これももちろん空想映画ですから、細かい作動原理などは全然わかりません。はっきり言って荒唐無稽なものだと思うんですけども、とりあえず強力なんですね。ここ（資料）に出てきますが、これがオキシゲン・デストロイヤーという装置でございまして、これを持っているこの片目の科学者が芹澤博士という人なんですね。この人は、何で片目になったかという、第二次大戦でけがをして、片目の視力を失ったという設定です。この人もやっぱり第二次大戦からの連続性の中に生きているんですね。この科学者が偶然発明してしまったのがオキシゲン・デストロイヤーという装置であったと。これが非常に強力な破壊力を持っているということ、この科学者は知っているんですね。自分では知っている。さらに、そのうわさが少しずつ漏れていた。このオキシゲン・デストロイヤーというものを使って、ゴジラを倒せないかというそういう要望が、この科学者のところに寄せられるんです。

だから、水爆ですら死ななかつた、水爆よりも強い怪獣を倒すことができる。ある意味で究極の最終兵器ですよ。こういうものをつくった芹澤博士という人のところに、これを使ってゴジラをやっつけられないかという、そういう要望が寄せられる。そのときに、この芹澤博士は断るんですね。そんなことは、私はそういうことに協力はできないと。何でかと言うと、私はこういう究極の兵器をつくってしまったと。これを一度でも使ってしまうと、必ずだれかがそれを悪用することになると。そう芹澤博士は語って、かたくなにこのオキシゲン・デストロイヤーというのを使って、ゴジラを倒すという計画にのることを拒むんですね。そういうやりとりがあるんですが、さすがにゴジラが破壊を尽くすと、そういう状況の中で芹澤博士も考えを変えていく、やはりここはゴジラを倒さなきゃいけないというふうに考えを変えるんですね。ただ、ゴジラを倒すために、オキシゲン・デストロイヤーを使うという決断をするんですが、芹澤博士はそこでかなり悲壮な決意をするんですね。どういうことかとそのオキシゲン・デストロイヤーを使って、自分も死ぬ。ゴジラを倒すんだけど、自分もそこで同時に死ぬと。自分が死んでしまえば、オキシゲン・デストロイヤーをつくる技術というのは、もう封印されてしまって、だれも使えなくなると。その結果として、これは科学技術なんだけど悪用されることがなくなるであろうというふうに考えるんですね。その悲壮な決意を持って、ゴジラを倒しに行くところをビデオからクリッピングしたのが、この映像なんです。潜水服を着ていますよね。この後、海の中に潜って、彼はそのときにはまだそう自分が死ぬということを周りには言っていないんですが、命綱を自分で切って、切った状態でオキシゲン・デストロイヤーを作動させてゴジラを破壊し、さらに自分も、自分の体も破壊するという、そういう結末になっていきます。

これも、後のゴジラシリーズとは全く違う、救いのない終わり方なんですね。このゴジラの第1作1954年のゴジラというのも、かなり極端な形だと思います。非常に幼稚なものと言ってもいいかもしれません。実際にそのオキシゲン・デストロイヤーはという



ものだったかとか、そういう理論は全くないわけですし、自分の命を絶つことによって科学技術の悪用を防ごうという、そういう考え方というのは非常にある意味では映画の中でしか成立しないようなものかもしれませんが、それでもやはり一つの科学観ではあると思うんですね。科学技術は必ず悪用されるから、科学技術そのものを否定しなきゃいけないという、そういう科学観を示した作品になっていたと思うんです。

このゴジラという作品が、今見ると非常に暗くて、日本人は当時の日本人はこんなものを喜んで見ていたのかというふうに思うかもしれませんが、やはりこれも後にシリーズ化されるように、非常に大衆的に受容される作品になっていきます。その科学技術というのは、必ず悪用されるんだという科学観も、これもある意味で多くの人を受け入れられ得るものだったという、一つの証拠になっていると思うんですね。そういうことを考えていくと、日本の科学技術受容の歴史の中で、やはりこのゴジラの1954年の第1作目というのは一つのポイントになっているというふうに思います。アトムやゴジラで素朴ながらも示された大衆社会、文化が科学技術と向き合う姿勢、先ほど核兵器の思想化という丸山真男さんの言葉を引きましたけれども、科学技術の思想化というのを大衆社会の中で行っていくような、そういう萌芽がそこにはあったんじゃないかというふうに、私は思うんです。ただ、それがその後、なくなったんじゃないかというのが、この後の議論につながっていくところですね。

ゴジラが第五福竜丸事故が生み出したというふうに御紹介しました。ゴジラだけではなくて、第五福竜丸事故の後には、原水爆実験禁止運動という非常に大衆的な科学技術否定の動きがありました。その延長上であれば、恐らく今柏崎・刈羽の原発もできなかったでしょう、きっと。第五福竜丸の事故の後に起きた科学技術否定の動きをひっくり返す動きがあったんですね。今日は、そのあたりを考えることで後段の議論につなげていこうと思うんですけれども、そういう原水禁の運動を一気に覆そうとしたのは、読売新聞の当時の社主であった正力松太郎さんという方がいるんですが、この人のマスメディア戦略であったという、そういう視点から、このゴジラ以降の歴史を少し見てみようと思います。

それで、ゴジラは1954年でした。第五福竜丸の事故も1954年ですね。3月ですね。その後、1955年の読売新聞というのを縮刷版などで見ていただければおわかりになると思うんですけれども、1955年の読売新聞はもう原子力の報道ばかりなんですね。お正月の第一面からアメリカの原子力平和使節ホプキンス氏を本社で招待すると、そういう記事が一面のトップに出るんですね。1月1日はそうであったと。1月3日、2日は休館日ですから、次の1月3日が新聞の出る日ですけど、ウラニウムラッシュであると、福島石川山というところにウラニウムを探す学生がたくさん集まっていると、そんな記事が出たりする。1月28日の広島に原子炉建設費2,250万ドルと、米下院で緊急提案とかこんな記事が出たりする、これは全く誤報ですね、後から考えればね。2月10日には原子力マーシャルプランとはとかね、そんな記事が出る。3月24日には明日では遅すぎる原子力平和利用とか、1955年の読売新聞というのは、まさに原子力広報一色になっていくんですね。これは、次の年の1月4日ですけども、原子力委員会ができて初の会合というのが、これもやっぱり1月4日の新聞の一面に出ると、今は原子力委員会の記事が一面に出ることというのはどうでしょうね、ありますか。やっぱりちょっとある種違う時代という感じがすると思うんですけれども。

この真ん中にいるのが正力さんですよ。湯川秀樹がいたりとか、そういう大物をそろえてスタートしたのが原子力委員会ですけれども、正力松太郎は自分が持っている、自分が社主を務めている読売新聞で、なぜここまで原子力の平和利用というのを記事にしていたかと申しますと、正力松太郎は、この時期、政界に進出しようとしていたんですね。先ほど1955年の1月から原子力平和利用だということをやったという記事が出たというふうに申しましたが、この時期にも衆議院選に出るということを決めておりまして選挙活動中だったわけですよ。2月には衆議院に当選するということですね。その後、保守合同は1955年ですから、55年体制ができる年ですけれども、保守合同に非常に貢献するんですね、正力松太郎は。そのある種の論功行賞でもあるんですけれども、原子力委員長になるんですよ。それは、翌年の1月になるんですが、ここの記事がそうですよね。

何で原子力委員長になったかということ、それまでの正力の政界をねらった選挙活動もそうなんですけれども、正力松太郎は原子力平和利用こそが日本を豊かにするんだ。日本の戦後社会を戦後の復興を原子力こそが担っていくんだということをやったって、原子力平和利用というのを自分の政策として掲げるんですよ。それで、それを読売新聞を使って、原子力平和利用こそが今の時代の潮流であると、日本はこれをやんなきゃいけないんだという、そういうふうな主張を次々にしていくことになる。その流れの延長上で原子力関係の政策をつかさどることになる原子力委員の委員長にもなるという、そういう経緯をたどっていきます。ある意味、日本の原子力が今あるのは、正力松太郎があったがゆえですよ。

先ほど申しましたように、1954年には第五福竜丸の事故があって、原子力に対する非常に否定的動きというのがすごく強くあったわけですよ。それを一気に描きかえてしまったのは、正力松太郎のマスメディアを使った、ある種の巻き返しの動きのせいだったと、そういうふうに言っていると思います。ただ、正力松太郎自身が原子力について詳しくなかったかということ、全然そうではなかったらしいんですね。ここ(資料)の上のところに描きましたけれども、彼にとってはやっぱり科学技術よりも政治であったと。自分が政界進出をする、議員になる、国会議員になる、さらには首相までなろうとしていたんですね、彼はね。首相公選制みたいなものが少し可能性が見えていた時期でありまして、公選制になれば、マスメディアを持っている自分はやっぱり圧倒的に強いであろうと、さらに原子力のような原子力平和利用をやったって、それを国民的に要望されるような政策にしていけば、その力も借りて首相にもなれるかもしれないという、そういう野望を持っていたんですね。

あくまでも、だから政治的な野望を実現するための原子力平和利用だったと言っていると思います。それを象徴するこんな事実があるんですね。科学技術庁ができる前の話なんですけれども、その準備段階で科学技術振興対策委員会というのがあったんですが、そこに出席した正力松太郎は核燃料という、漢字が読めなくて、がい燃料と読んだという、そういうのが議事録に残っているんですね。これは私は初期の原子力委員会の事務をやっていたような官僚の方と、前に会ったときに確認をしたら、そうであろう、彼はこの読み違いそのものは知らなかったんだけど、正力松太郎が原子力について全く知識がなかったというのは、それは間違いないだろうというふうに言っていましたね。こういう人が、日本の原子力平和利用の幕を切って落としたというのは、やはり一つ我々は踏まえておくべ

き事実なんだというふうに思うんですね。

正力松太郎は、科学的な知識もなしに、とりあえず原子力平和利用であると、原子力平和利用さえできれば日本は豊かになると、そういうことを読売新聞を使って次々にキャンペーンをし続けたというわけです。それがどういう動きになったのか、どういう結果になったのか、それを象徴するような人物をここでは少し御紹介したいなと思います。これは「核論」の中にも1章書いたものなんですけれども、東善作さんという方を一つのケーススタディのモデルとして、今日は御紹介したいと思うんですよ。先ほど正力松太郎の読売新聞の中に福島にウラン探しの学生が殺到しているという記事があったというふうに言いましたね。原子力平和利用になれば、何とかしてウランをつくらなきゃいけないと。つくるといふか手に入れなきゃいけないと、日本にウラン鉱山がないか探さなきゃいけないという、そういう動きが読売新聞のその原子力キャンペーンに共振共鳴するような形で、かなり全国的な動きになっていったんです。

そういうウラン鉱脈探しの一つの象徴的な人物が、この東善作という人なんですね。かなり数奇な人生をたどった人なんですけれども、最初は飛行機なんですね、この人はね。飛行機乗りになかったんです。パイロットになることを夢見てアメリカに渡るんですね。アメリカ軍で、空軍に所属する。除隊後はアクロバット飛行のパイロットになると。ロサンゼルスから立川まで飛んで帰ってくるみたいな、そういうこととして、新聞で紹介されたりとか、そういう非常に話題を呼ぶような人だったんですね。この人が戦後は日本に帰っていたんですが、GHQ相手の骨董品業を営んでいたんですね。ある意味で、雌伏しているというか、それまでの華やかな人生とはちょっと違う割と地味な生活を営んでいた時期があるんですが、その時期の東善作がアメリカの新聞を読むと、アメリカで自分がパイロットをやっていたころの知人が、ウラン鉱山を発見して財をなしたという記事を発見するんですね。それを見て、自分もウラン鉱山を探す、ウラン鉱山を探そうと思いつくという、それが東善作の後半生を決めていくきっかけになるんですが。

東善作は、アメリカに知人がいたので、そのつてをたどってガイガーカウンターを手に入れるんですね。携帯型のガイガーカウンターというのは、当時は日本の国側の機関も持っていないようなものでありまして、それを持って日本全国を行脚して、ウランがないかということを探し回るんです。それが話題になって、正力松太郎配下の読売新聞も東善作をウラン爺なんて呼んで盛り上げるんですね。ウラン爺に続けということですよ。みんながウラン鉱山を探して、一攫千金で大金持ちになろうじゃないかという、そういうような炊きつけ方をしていたんですね。そのウラン爺こと東善作はガイガーカウンターの効果もあって、一つかなり有望なウラン鉱山を発見するんです。それが、岡山県と鳥取県の県境にある人形峠です。人形峠のウラン鉱山の採掘権を取得することになります。このあたりも、かなりドラマチックな展開があって、国を相手どって自分の方が先に採掘権を取得するために、大立ち回りを演じるという、そういうエピソードがあるんですけれども、そのあたりは、佐野真一さんの巨怪伝なり、先ほど御紹介した鈴木明さんの、この東善作を書いた作品なりに書いてありますので、もし御興味があったら、かなりおもしろい話なんで、ごらんになっていただければいいと思うんですけれども、いち早く人形峠、ウラン鉱山の採掘権を取得し、ウラン鉱業という会社を設立し、人形峠でウランを掘って、それを国に売って、日本はきっと原子力平和利用で原子力発電所がたくさんできて、ウランを必

要とするようになるであろうと、そういうときに自分の人形峠のウラン鉱山からウランを  
どんどん売って、どんどんお金をつくって豊かになろうというふうに思うわけです。まさ  
に一攫千金の夢、アメリカ時代の友達が果たしたのと同じように、自分も大金持ちになれ  
るんだと、そういう希望の絶頂に東善作はいるわけです。

ところが、そういう東を歴史は裏切っていくんですね。人形峠のウラン鉱山というのは、  
決して品質的には国際級ではなかった後にわかる。海外から買った方が安いし、さらに品  
質がいいものが手に入るということがわかっていく。このあたりは、だからウランが買え  
るか買えないとか、そういう制度的な問題もあったようです。買えるようになってしま  
えば、海外から買った方がはるかに品質が高いものが安く買えるということです。そう  
いう制度の変更もあって、東善作の一攫千金の夢はついでるんです。せっかくなつきたウラ  
ン鉱業株式会社というの、全く利益を出すことなしに、結局つぶれていく。どうしよ  
もない状態で71年に同年に採掘権を譲渡して会社を解散するという結果になります。一  
攫千金どころではなかったんですね。こういう軌跡をたどったのが東善作なんです。こ  
の人をあえてここで取り上げて御紹介したというのは、今から考えると、かなりの奇行を  
しているんですね。ウラン鉱石を入れたお風呂に入った。そのウラン鉱石を入れた水で野  
菜を育てようとした、ウラン茶を飲んだとかね、そういうことが語り継がれております。

これは今から見るととんでもないというふうに思いますよね。こんなことをする人がい  
たのか、違う時代の話ではないかというふうに思うかもしれませんが、当時の週刊  
誌の記事なんかを見ると、決して東善作だけではないんですね。ウランを入れれば何でも  
よくなるんだという、そういう原子力に対する非常に無垢な期待というのが、当時はあり  
得たんです。その少し前は、第五福竜丸の事故があって、国民運動としての原水爆禁止運  
動があった。もちろんそれを続けている人がいたんだけど、その後は、原子力平和利  
用キャンペーン、この後の未来というのは原子力によって開かれるという、そういう報  
道を読売新聞がたくさんした、ほかの新聞社もそれに追随していますよね。そういう状況  
の中で、経済発展もするけれども、さらに個人の健康促進もすべて原子力で実現される  
というように、そういうようなことを思う人が、かなりの数出ていたというのが事実なん  
ですね。ある意味では狂ったように見えるかもしれない。この狂ったように見えるかもし  
れなけれども、これが我々の戦後の原子力とのかかわりの中の一つの事実としてあった  
という、そういうことを僕たちは踏まえなきゃいけないと思うんですね。

科学技術と正しく向き合えない、現状まで至る問題がある意味では、ここで象徴的にあ  
らわれているのではないかと、こんなことを考えたりもします。やり過ぎたのかもし  
れなですね。正力松太郎が原子力平和利用というのを自分の政策としてうたうために、原子  
力平和利用さえできれば何でもできるみたいな、そういうことをうたい過ぎた。マスメ  
ディア過剰利用の功罪というふうに描きましたけれども、そういうことがあったのかもし  
れない。やっている張本人の正力松太郎自身がが燃料と読んじょうような人ですから、決  
して科学的な事実を踏まえて、それをきちんと評価しようという、そういう姿勢はな  
いわけですね。何となく原子力はいいいんだ。何となく原子力さえ使えば経済も豊か  
になるし、個人も健康になるんだという科学的ではないそういう判断をするようになって  
しまったという、ある意味で振り子が逆に振られ過ぎるというような、そういう状況があ  
ったんだと思います。

山本七平さんの空気の研究という本がありますけれども、そこに書いてあるような何となくの空気によって、原子力平和利用さえできれば、すべてよくなるというふうに思う人が出てきてしまった。こういうような状況が歴史の中にある、限られた時間かもしれないけれども、あったということを踏まえて、我々は科学技術に対する考え方というのを、もう一回このあたりまで振り返ることによって、見直してみる必要があると思うんです。

少し時間が押してきましたけれども、アトムからゴジラに行った過程においては、科学技術に対する真摯に向かい合うような姿勢は、素朴ながらもあったのではないかと。しかし、その後、東善作のような人が出てくる。あるいは狂ったとしか思えないような、原子力に対する姿勢をとるような状況に日本は向かっていってしまったと。それがどういう理由によるのか、どういう状況があれば、こういうふうに原子力なり科学技術なりに対して、それがすべて自分たちの未来を明るくするものだというふうに根拠なしに信じてしまうようなそういう状況になるのか、それをやっぱりもうちょっとちゃんと考えてみるべきだと思うんです。

僕は、「核論」の中で、東善作の話を取り上げましたけれども、そこでは、狂っているのは東善作だけではないのではないかと、そういうふうな問題意識でもう一度自分たちの科学技術に対する姿勢というのを省みる必要があるのではないかと、書いたんですね。そのあたりのことを少し御説明したいと思います。東善作はウランを入れたお茶は二流のお茶でも玉露になると、二級酒でもウラン鉱石を入れれば一級酒になるとか、とんでもないことを言うんですけれども、そういうふうに科学技術が何らかの効果をもたらすというふうに信じるような、そういう姿勢というのは、実は東善作だけではなくて、我々のだれもが科学技術を合理的な判断を超えて信じてしまう。そういう姿勢を持つことがあるんじゃないかなと思うんですね。そのあたりのことを少し踏み込んで考えてみたいと思うんです。

一つ押さえておくべきことは、どんな科学技術においても、未知の領域は残るんだという、そういうことを我々は押さえておくべきじゃないかなというふうに思うんですね。そのことを「核論」では書いたんです。例えば、原子力関係のことで言いますと、低線量被ばくの話がありますよね。最近ではホルミシス効果みたいな、そういう議論もあって、低線量の被ばくであればむしろ健康に有益であると、そういう考え方をされる方もいる。一方では、低線量被ばくであっても、人工的に放射線を浴びるのは決してよくないんだという、そういう立場をとられる方もいる。それぞれの立場があると思うんですけれども、これって低線量被ばくの有益性、あるいは有害性というのは、科学的に証明できることじゃないですよ。ホルミシス効果でラッキーという学者のゾウリムシの実験の成果というのがよく聞かれますけれども、ゾウリムシで、寿命が短い生物だからこそ実験はできましたけれども、人間だったらどうかというのは、実証科学的には証明しにくいですよ。仮に実験室の中で低線量被ばくを知った人にさせる、その人が一生どういうふうに生きていくかというのを調べない限りは、実証科学的には低線量被ばくの影響というのは調べられない。これは明らかに実現不可能な実験ですよ。そういう実験室的な環境の中に人を閉じ込めるということもできませんし、たとえその人ががんになったとしても、それがその実験のときになされた低線量被ばくが原因だったのかどうかというのは、もしその人が実験室の中から出てしまっ、外の放射線を浴びたりとか、あるいはたばこを吸ったりとか、いろいろがんを誘発する要因というのはあると言われているので、そういうものががん

になったのか、あるいはその実験のための低線量被ばくでなったのかというのは、これは証明しきれない状況だと思います。だから、実証科学的には、証明できないのが低線量被ばくの有益性あるいは有害性の問題だと思うんですね。事ほどさようにやっぱり科学技術というのは、科学的に証明できない領域というのが必ず残るもんだというふうに、そういうふうに考えるべきだと思うんです。

ここ（資料）に図を描きました。科学技術全体で、これが科学技術全体だとしますね。今わかっている領域があると。低線量被ばくはよくわかりませんが、線量が多くなれば明らかに有害ですよ。それは既知の領域になってくると。その周りにもしかしたら将来的に知ることができるような、可知の領域というのがあるかもしれない。例えば低線量被ばくに関しても、もし細胞の一生が、コンピューター上でシミュレーションができるようになってくる。その時間軸を非常に短縮して、短時間の中に例えば50年先の細胞の状況がわかったりとか、あるいは思想面への影響みたいなものもコンピューター上でシミュレーションできて、非常に短期間でわかるようになってくれば、少しはわかるようになるかもしれないですよ。でも、それでも可知の領域の中で、ある程度既知な部分が広がっていくということではない。それでもどうしても、不可知な領域というのは残ると思います。実験室でコンピューター上でシミュレーションをできるのが、生物のすべてかと言えば、そんなことは全然ないわけですよ。人が生きていくというのは、非常に複雑な状況の中で、いろんな形で影響を受けながら、人は生きていくわけでありまして、そういうものがどういうふうに関与していくかというのは、これはやっぱり実験、コンピューター上でシミュレーションできないものだと思います。

そういうふうを考えていくと常にこう不可知な領域というのが、残らざるを得ないというのが、科学技術の宿命だと思うんですね。特に先端的な科学技術、例えば塩をつくる技術なんかは、もう人類と同じぐらい歴史があるわけです。そういうものが、どれぐらい危険があるかとかそういうことってのはもう実証されていると言っていいと思いますね。ところが、先端的な科学技術というのは、そういう実証されている領域がやはり少ない。わからない領域というのは非常に多くなっている。だから、先端的な科学技術ほど宿命的に未知な部分、不可知な部分と可知だけどまだ未知を足した部分を持つ。宿命的に未知性を担うと思うんですね。

そういう科学技術であるがゆえに、やはり科学的にわかる領域ではなくて、その先に関しては、我々はどうしても信じざるを得ない、そういうような立場をとらなきゃいけないことになってくると思うんです。低線量被ばくに対して、それは有益だというふうに言う学者がいる。それもある意味では、それは科学的に証明されているというふうに、その方は言うかもしれませんが、僕はそれは信じているだけだと思うんですね。一方で、それが危険だという立場もそれも信じているというふうに言っていいと思います。だから、実証的に証明できる領域を越えた部分に対して人間がその科学技術を評価するときには、それは合理的に説明する、合理的に証明するとか、そういうことではなくて、やはり信じることになっていくんだと思うんです。

信じざるを得ないことというのがあるんですね。やっぱり今の時点で、あるいはあしたまでに、あるいは1カ月先までに、あるいは1年先までに何らかの決断をしなきゃいけない。科学技術に対して、それを使うか使わないか決めなきゃいけない。こういうことっ

ていうのは、よくある話です。ただ、それでもやはりわからない領域が残ってしまう、どうしても宿命的に未知な領域が残ってしまう。わからないなりに、我々はこう社会的決定を下さなきゃいけないというそういうことがあり得るのが、科学技術社会の現状だと思います。

わからないことを、わからないままに決定をくだすという、こういう姿勢を語る上で、ふさわしい言葉は私は賭けだと思うんです。我々はこう未来にかけるということをしていると、信じることしかできなくても、決断しなければならない、そういう状況で科学技術がどっちに転ぶか、自分がこっちだろうと思うような方向に賭けている。これはだから合理的判断では全然なくて、やはり一つの自分の信念にかけるといって、そういうことなんだというふうに考えた方が説明がしやすいんじゃないかなと私は思っています。ただ、やはり無謀なかけは、よくないですよ。よき賭け手になるというそういう必要が僕らにはあると思うんです。そのときによきかけ手になるためには、どうすべきか。そのときに必要なのは、本当に今の時点でどこまでわかっているのかというのを、領域をしっかりと輪郭づける。そういう作業が必要だと思うんです。今はここまでしかわかっていないと。この先はわかっていないんだと。科学技術の分野の中で語られているんだけど、わかっていない領域なんだと、ここから先は信じなきゃいけない領域なんだということをしっかりと認識するという、それは必要だと思うんですね。これはやっぱり科学的なものの考え方にとって、非常に基本的な姿勢だと思います。

さらに、ここまでは将来的にはわかるかもしれない。ここから先はいかに科学技術が進んでもわからないだろうなという、可知と不可知の境界みたいなものもなるべくこうクリアに考えようとする。そういうことを考えるというのが、私はよき賭け手になる上で必要な姿勢ではないかなというふうに思うんですね。こういう姿勢をやはり我々は、科学技術によって、科学技術に依存している社会においてやっていかなきゃいけないと思うんです。それぞれの人々がやっぱりそれぞれに信じているわけですよ。それぞれに信じて自分たちの仲間と一緒に自分たちの信念を共有するような、そういう共同体をつくっているというふうに言っていると思います。そういうような共同体の中に、一方でこういうふうに低線量被ばくは有益なんだと言う共同体があり、一方では、低線量被ばくだって危ないという、そういう共同体があると、その間で議論ができていない。話が通じ合わない、そういうのが私は現状じゃないかなというふうに思うんですね。

そこで、先ほど一番最初に報告しましたけれども、共同性と公共性の問題という、そういうところに議論を移さないと、そういう議論不能な状況の説明というのができないんだと思うんです。大分時間が押してきましたので、話を少しはしょって、後段の議論でももう少し補足して説明ができるというふうに思うんですけれども。共同体の間で議論ができない状況の一つの理由として、こんなことがあるんじゃないかなと思うんですね。自分たちが信じる信念を共有して共同体をつくっている。その共同体が拡大していけば、社会全体を覆うことができるというふうに、そういうふうに考えている人が多いんじゃないか。だからこそ相手の話に耳を貸さない、自分たちの信念が正しいんだというふうに信じているがゆえに、その正しさを主張して、それで相手を説得して、相手が自分たちの信念を共有するようになれば、それで問題が解決するんだというふうに、そういうふうに簡単に考えている。そういう人がいるのではないかなというふうに思うんですね。

自分たちの共同体を拡大すれば社会全体になるというふうな、そういうイメージで社会を考えている人がいるんじゃないかなというふうに思うんですが、社会というのはこういうもんだと思うんですね。価値観を異にする集団共同体を包み込む形で社会は成立していると。共同体を複数の形で、それも同心円的な共同体ではなくて、いろんな形でこの共同体がぐちゃぐちゃに絡み合っているという、そういうような状況が社会全体を形成しているんだというこういうイメージで社会を見る姿勢がないと、私は議論ができないんじゃないかなと思うんですね。互いに一つの信念を共有して共同体をつくっていると。自分にとってはそれは正しいと思えるわけですよ、信じているわけですからね。正しいと思えるからこそ人に対してもそれで説得できると、人も自分と同じ考え方をするようになるんだというふうに安易に考えてしまう。でも、そうじゃないんですね。相手もやっぱり何らかの信念を持っている。相手もそれを正しいと思っているわけですよ。正しいと思っている人たち同士が話をするからこそ話は通じない。互いに正しさを主張するだけであって、全然話ができないというそういう状況になってしまう。

そうではなくて、やっぱりそれぞれの価値観を持って、集団をなしている、そういう共同体というのは、こういう形でいろいろ複雑に入り組んでいるわけですよ。そういう状況の中で、どこまでだったら話し合いが通じるか、どこから先はやっぱり信じている領域であって、ここから先は議論ができない。そういう領域なんだということを区分けして、どこまでであれば議論ができるか。どの範囲であれば合意がとれるかという、そういうことをしっかりやっていく、合意をとっていきようなそういう姿勢で向き合わない限りは、科学技術に対する考え方というのは乖離する一方で、全然和解の方向に行かないんだというふうに思うんですね。

そういうことを考える上では、やっぱりそれぞれの価値観を持った共同体を横断する形で、それぞれの人にとっても、これだったら合意できるというような、そういう公共的な利益という考え方をいかに見出していけるか、そこが問われると思うんですね。共同体の共同性にこだわるのではなくて、公共性の軸で物事を考えていきような、そういう姿勢が必要なんだと思うんです。科学技術に対する多様な価値観をいかに調停しつつ、受容の着地点を見出していきかというふうに資料では描きました。やっぱりそれぞれの価値観があるわけですよ。信じている領域というのは、やっぱりこう入れないところがある。それを信じていない人にとっては、何でそんなことを思うのかわからない領域になってしまうと思います。そこまで変えようと思ったら、それはやっぱり神学論争ではないですけども、全然こう妥協点が見出せないと思うんですね。どこまでだったら和解できるか、どこまでだったらある種の最小公倍数といいますか、最大公約数といいますか、互いに納得できるようなそういう妥協点が見出せるかという、そのあたりを科学技術に対しても、科学技術だからすべて科学的に説明できるんだって信じるのではなくて、やはりこう科学技術においても未知性がある、信じなければわからない領域があるんだというふうに認識することによって、共同体をまたぐようなそういう公共的な合意に達していきようなある種の議論の技術といいますか、そういうものを持っていき必要性があると思うんですね。特に原子力のように、非常にこう受益も受苦も影響の及ぶ範囲が広い技術の場合には厄介でありまして、その複数の共同体をまたいで受益構造が発生したりとか、受苦があったりするわけですよ。そういうような複数の共同体をまたいでいく形で、共通の和解点



を見出していくのはかなり厄介だとは思いますが。でも、それをやらなければ、原子力に対する議論というのはできないんだと思うんですね。

共同体だけではなくて、実は個人も重層的な存在だというふうにここに描きました。一人の人が、例えば電力会社の社員であったりする。もちろんだから電力会社であるから、電力会社の社員であるがゆえに、電力会社の利益をふやしていくためにすべきことというのがありますよね。社員としてすべきことというのが、おのずと決まっていると思います。ただ、その人も家に帰れば父親かもしれない、その子供のためにどういう社会を残していけばいいのかというふうな考え方をとるときには、そのときには会社員としての立場とはちょっと違う考え方をするかもしれない。あるいはこの人も市民として何らかの活動をしているかもしれない、コミュニティ紙の記者をしているかもしれない。だとすれば、自分が伝えるべき情報というのは、どういうものであるべきかとかね、考えると思うんですが。そのときにもやはり電力会社員とは違う考え方をするかもしれない。さらに父親として自分の子供のことだけを考えるのではなくて、地域を考えたりとか、あるいはもっと広がりを持って地球環境を考えたりとか、そういうことをしなきゃいけない立場もあるかもしれない。あるいは両親が最終処分予定地の近くに住んでいるというそういう個人的な事情もあるかもしれない。こんなことを考えていくと個人でも科学技術に対するどういうふうな向き合い方をするかというのは、その立場立場で変わっていくものだと思うんですよ。となると、先ほど申しましたように、いろいろ価値観を異にする共同体の間で和解を、和解というのは見つけていくのは難しいというふうに申しましたが、実は個人のレベルでも、どういうふうに科学技術に向かい合っていくのかというそのポイントを見つけていくのは、実はそんな簡単ではないんですね。非常にこれは難しいと思います。いろいろこう利益が相反したりとか、一つの面から見ると害なんだけれど、別の面で見ると有益であったりとか、そういうことは往々にしてありがちですから、和解点を見つけていくのは大変だと思います。でも、やっぱりそれをしなきゃいけないと思うんですね。そういう和解点を見つけていくための技術を、できれば日本社会で共有できるといいなというふうに思って、そういう気持ちで「核論」を描きました。

その中で一つポイントを挙げました。どういうことかということ、未知性をどういうふうに受け入れるかということなんですね。先ほどやっぱり科学技術というのは、どう考えてもわかんない領域があるというふうに言いました。わかんない領域があるからこそ間違い得るんです。だとすれば、間違い得ることを前提として我々は科学技術に向き合うという、そういう姿勢が必要ではないかというふうに思うんですね。可謬主義という言葉をここで引いておきます。間違い得るということですよ。可謬主義の立場に立って、科学技術に対して向かい合う、そういう姿勢が必要なんではないかというのは、「核論」の中で強調したポイントでございます。これは「核論」の中では事例として挙げなかったんですが、可謬主義的な立場を説明する上で、こんな例があります。

例えば入試ですね。大学院の入試のシステムをつくるという、そういう立場をとる人がそのときに、あり得る最大限すぐれた入試のシステムをつくり上げたとします。例えば学部時代の成績をそれぞれの科目ごとにこういうふうに換算して、それで評価して、さらに入試のポイントをそこに加算して、さらに卒業論文をどういうふうに評価するかとかね。そういうことをシステム化してこういうシステムをつくれれば一番優秀な学生が合格させら

れる。優秀な学生を大学院に迎えらるというそういうシステムをつくったとします。大抵の場合には、そこで満足して終わりだと思うんですよね。そうではなくて、やっぱり可謬主義といいますか、そういう最大限、今の時点でとり得る最高の技術を実現したというふうに思っても、それでもやっぱり人間のやることだから間違ふことがあり得るんだという、そういう可能性を視野に入れる。そのときにどうするかということなんですが、これは現実にはちょっと問題のある方法だと思うんですけれども、一例として考えてください。

その最高の入試のシステムと同時にランダムに学生を入学させるんですね。全くランダムに成績とかを問わずに、純粹にこう乱数表なんかに基づいて、学生を大学院に迎え入れるで、そのランダムにとった学生と、最高にすぐれていると思われる入試のシステムによって、入学させた学生の間の成績を比較するんですね。その後、どういうふうに伸びていくかというのを比較する。それで、もしもランダムに採った方が最高だと思われる入試システムによって採ったものよりもよくなってしまったら、これは最高だと思った入試システムが間違っていたということですよ。間違っていたと思った時点で、それを見直す、最高だと思っていたシステムを見直す、そういうことをあらかじめ制度化しておく、これが最高の入試システムであると思えるものを取り入れる。しかし、それが最高でなくなる可能性というのは、あらかじめ予測しておいて、それが最高でなくなることが明らかになった時点で、もう一度見直すということを最初から制度として取り入れておく。こういうようなやり方が可謬主義のやり方だと思うんです。

科学技術に対してもやっぱりこういうような可謬主義に立って、間違ったときにどういうふうに方向転換するのか、間違ったときには方向転換するんだということをあらかじめ制度化しておくような姿勢が必要なんじゃないかなと思うんです。これは、でも原子力を例にすると、やっぱりちょっと難しいと思うんです。かなり影響範囲が広いと申しましたが、重大な事故が起きた場合には、取り返しがつかない、不可逆的な被害を起こすという選択になる可能性があると思います。でも、そうであるがゆえに、可謬主義なんて言っても、そんなに甘ったるいことでは原子力については、考えられないんだとお考えになる方も多いと思います。ただ、先ほど、賭けというふうに言いましたよね。賭けであるということをやっぴりもう少し真摯に受け取る。賭けざるを得ない立場にあるんだということを見直すと、そういう必要性があるんだと思うんですよ。確かに間違いが起こったら不可逆的な被害が起こるかもしれないと、でも起きなかったらどうか、起きない方に賭けるということで、未来を手に入れることというのも、それも一つの選択肢だと思うんです。ある意味で、そういう何らかのことがあったときには、不可逆的な被害を起さるかもしれないと、そういう可能性を自覚した上で受け入れるというそういう選択も一つあり得るんだと思います。

どっちにしろというわけではないですよ。先ほど申しましたように、どこまでだったら科学的に説明できるか、どこから先は信じるしかないのか、そういう線引きをちゃんとしていく、そういうような作業の中で、今の時点でどれくらいリスクというふうに言われているか、それはどこまで科学的な議論になっているか、そういうことを注意深く見ながら、間違ったらどういう被害があるか、その被害がたとえ大きいとしても、被害が起きる確率がどれくらいあるのかとか、そういうことを考えた上でどっちかを選ぶという、そういう姿勢をとっていく、そういうこともできるようになっていくと思うんです。そう

いう判断を求めるのが、今の科学技術の現状なんだと思います。

アトム大使には、科学の有益性、有害性を見る視点があったということを示しました。科学技術の両義性をちゃんと踏まえて科学技術に向かい合っていく、そういう姿勢が1951年の鉄腕アトムにはあった。1954年のゴジラには科学というものは否定しなきゃいけないんだという非常に厳しい科学批判の姿勢があった。そういうものを踏まえながら、科学技術に対して向かい合って、科学技術というものがどういうものかということを考えていけば、その両義性だけではなくて、先ほどから申しました科学技術というのは常にこう未知の部分が残ってしまうんだとか、そういうことも、真剣に向かい合った結果、当然認識できると思うんですよ。そうであれば、未知のものを踏まえてどういうふうに制度設計をすればいいのか。未知の領域を残しながらも、何らかの社会的な決定をしなきゃいけないときに、我々はどういう社会決定のシステムをつくれればいいのか、そういう議論というのは自然にできていったと思うんです。やはりこの1951年、1954年のころにあった科学技術に対する真摯な向かい合いというのが、その後なくなってしまっている、50年近くそういう状況があったというのが、ある意味で今、先端的な科学技術に対して受容するか、もちろん拒絶するのでもいいですよ。どちらでもいいんですけども、いずれかの姿勢をとろうとするときに、どうしてもこう腰が落ち着かないというか、足元が確かではないところで何となくの気分で決めてしまっている、そういう状況になっているんじゃないかと思うんですよ。

「核論」の中では、その後のところはゴジラを取り上げて、さらにその科学技術の未知性についても議論しました。そういうものというのは、今我々の科学技術に対する姿勢のあり方に対する私からのある種の問題の提起であり、それに対して何らかの打開策をとってほしいなという、そういう思いのあらわれでもあります。原子力については、決して専門家ではないんですけども、まじめな気持ちで書いた本でございますので、もしよろしければ、今日は部分的にしか御紹介できませんでしたが、お読みになっていただいて、御意見とかを聞かせていただければいいなというふうに思います。

ちょっと長くなりましたけれども、議論がその後あればいいなというふうに思いますので、ここまでにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

新野議長

私たちの会は現実的な話の議論が多いのですが、今日は大学で若かりしころの講義を、また伺っているような新鮮な気持ちで聞かせていただきましたし、かなり概念的なお話なので、私たちの委員会、委員としての活動の日ごろとはまた随分違う今日は勉強会だったかと思います。最後のころには、やはり何がおっしゃりたかったのか、何となくわかったような気もしますし、何かこうちょっと日ごろとは大分違う視点の議論になるかと思うんですが、質問とか自分の考えはこうだけというような御意見がありますでしょうか。

高橋委員

鉄腕アトムからゴジラ、その辺は懐かしいなという話でお聞きしていたんですが、あの中で、ゴジラを倒すオキシゲン・デストロイヤーですか、デストロイヤーなんていうとブレスしか思い出さないんですが、そういうのを発明された。それで、その発明者もゴジラと一緒に自爆したとそういう話でしたが、我々原子力発電に関していろいろ議論しているんですが、原子力発電所で電力を起すことによって放射能が残るわけですよ。そ

れが廃棄物としてドラム缶の中に詰められて、最終的には六カ所村へということになっているんですが、膨大な量になると思うんです。それが今のところたまっている途中でこれから先どれだけたまるか、まだわからないわけですよね。そうした場合、私これ前からずっと思っているんですが、放射能そのものを利用できるというような研究というのは、今世界でなされているのでしょうか。ただ、単にどこかに貯蔵しておく、あるいは地下に埋めるとか、そういうことしか考えていないのかどうか、何か未来に、これから何年たつかわかりませんが、その放射能を今の言葉でいえばリサイクルといいますか、そういうような方法で利用できないのかなという、私個人の夢みたいなものがあるんですが、そういう研究、今レントゲンなんかは放射線で行っているわけなんですけど、もっとこう大量に利用できるような研究というのがなされているのかどうか、そこら辺教えていただきたいと思っているんですが。

武田氏

私、先ほどから何度も言いわけをしていますが、科学技術専門家ではないので、もし必要であればそういう専門家の方のお話を聞いていただきたいと思っておりますけれども、かなり希少な金属物の中に入っていると、そういう話がありますよね。希少なレアメタル的なものというものが、だから分離技術がよくなってくれば、かなり貴重な金属物、金属なり物質みたいなものが核分裂生成物の中から取り出せるとか、そういう話は聞いたことがありますし、もっと社会学とかそういう広い文脈の中で言えば、利用することが有益か無益かというのは、実はそんな簡単なことではなくて、極端な話を言いますが、その核分裂生成物の非常にこう放射線量の多いような物質というのは、今は兵器として利用されるようになってきていますよね。放射線、テロリストが使うということが一番可能性としては高いと思っておりますけれども、要するに核爆弾ではなくて、放射線を帯びているような物質をばらまくことによって、ある種の兵器としての威力を発揮させるという、そういう使い方をする人もいますよね。彼らにとってみれば、それは核分裂生成物の利用法なんですよね。価値観が違えば、事ほどに利用できるかできないかというのは、変わっていくという、その一つの極端な事例として、例えばそういうものも視野の一方に置いておくことによって、利用ということに対するある種のもう少し引いた視点から、こんなことが考えられるようになるのではないかなというふうに思うんです。

もう少しわかりやすい例で言えば、先ほど申しましたように、もっと再処理の技術とかが進んでくることによって、もしかしたら何らかの形で将来的に利用できるものが出てくる可能性はゼロではないですよ。だから未来まで視点に入れれば、利用ということを考える、考え方も変わってくるだろうし、今の時点で今の自分たちの価値観で利用できるかできないかというふうに言うのは、少し狭いかもしれないですね。もう少し広い視点から考えた方が利用ということに関しては、何らかの有益な発言ができる可能性はあるんじゃないでしょうか。少しちょっと思考実験的なお答えの仕方になりましたけれども、例えば利用ということの一つとっても、やっぱり科学技術に対して、一筋縄ではその評価ができないということの一例になると思うんですよ。だから今の時点で、今自分たちがよかれと思う価値観ではないところで、科学技術と向き合ってみる、そういうような広がりの中で議論することによって、もしかしたら今自分たちがよかれと思うことを貫こうとして閉じてしまっている可能性みたいなものがあって、それを乗り越えるようなね、そうい

うきっかけになるのかもしれない。わかりませんよ、それは、わかりませんけれども。例えばだから思考行実験的な話ですけれども、そんなこともお考えになってみると、ちょっと違う見方が科学技術に対してできるんじゃないかなという気持ちはするんですけれどもね。少し禅問答的な話になって申しわけないんですけれども、あえて言わせていただければ。

高橋委員

専門でないと言われますから、明確な、私が言うそういう研究は今なされているかいかというのは、先生としてはお答えは。

武田氏

確証のある答えはできませんけれども、例えば核種変換とかそういうことをやっているっしゃる研究者の人はいますよね。中性子とか当てることによって核種を変換して廃棄物処理しやすい物質にする、或いは再利用できるものにするとか。人が使いやすいような形に変えてくる努力はできないかというようなそういうことをやっている方の話は聞いたことがありますので、それはあくまでも伝聞ですけれども、そういうことをやっているっしゃる方はいると思いますよ。

高橋委員

わかりました。ありがとうございました。

亀田氏（一般傍聴）

たくさん述べられたんですが、私は実は先生が生まれる前に、もう東海村にいたからですけれども、原子力研究所事業ができたのは昭和31年ですから、第五福竜丸のときは29年です。今おっしゃったけれども、正力さんとか佐々木さんの話が出て、確かにそういうことを言ったということはありますけれども、今の僕一番ちょっと納得できないのは、そういう視点で見られているのかなと。例えば東海村、今言った、こう佐々木さんの例とかですね、正力さんのことによって、そういうマスコミでやったというふうに言うけれど、実は違うんですな。原子力研究所へ入って、昭和29年ですけれども、戦争終わって9年目で、どのように評価されてもいいけれども、我々原研に入ったときは、敗戦のひどい中エネルギーのない日本で、そこで何とかやろうじゃないかという若い連中がほとんど行っているわけですよ。僕なんかアメリカへ行ったときに早く行って日本で帰ってやるんだと、それは別にナショナリズムでもなんでもないので。自分の国の貧しさを何とかやりたいということがあったんで。第五福竜丸の意味というのは、私はいわゆる俊鷲丸という船で第五福竜丸の被ばくしたところへ調査に行っているわけですよ。そういうときの22名の若い連中も…。あそこ魚が売れなくなってパニックになった。

武田講師

そうですね。廃棄しましたものね。

亀田氏

科学者はそういったときに、やはりそれを確かめてやらなきゃいけないじゃないかと、そういう意味では率直に言うと、三好というこれは水産大学の方なんですけれども、これは水杯までして大げさだけれど行った人もいるわけですよ。そういうふうにして、日本の原子力科学がもうケミストリーでも物理でもものすごく進歩したんです。だから科学のいろんな二面性というのは、いろいろあってプラス、マイナスのことがあるけれども、あれ

の持っていた意味は反核の運動も出だし、だけれどもいわゆる原子核科学、原子力科学というのは飛躍的に伸びていますね。だから、そういうようなところで、この時代を一つ見ていただかないと、今のような見方で言えば、ちょっとたまりませんな。

一番最初のゴジラとあれというのは漫画文化のことですから、私もその時代のものですから、いろいろあるけれども、これはもうちょっと論外です、僕に言わせると。先生の論理で一番大切なのは、やっぱり最後の方の今日のところで...、こちらにいる人って、今の質問がまさにそうなんですよ。一体役に立つんですかと。そういったような問題のところをやっていただいて、話していただくといいと。先生の「核論」の中でも高木仁三郎のあたりのところを、先生のやっぱりリアルタイムで知っていることだから、そのところをもっとこう深めて、我々にこう説明してわかりやすく、悩んでいるわけですよ、今。だから、もちろん漫画文化もいいし、正力さんもいいけれども、そういう時代の問題ではなくて、もっとその時代の持っている、先生でなければわからない、僕は高木さんの先生の書いたもので、かなり共鳴するところがあるんですけども、そういうようなお話をしていたら非常によかったかなというふうに思います。

それと、もう一つこれ54ページの先生のもので、1ページですけども、茨城県石川というのは、これか何か間違いではないではないですか。茨城県の石川というところでウラン鉱山が出るというので有名というのは、私東海村に18年いましたけれども、聞いたことはありませんけれども、僕の勘違いかもしれませぬけれど。少なくとも私は存じておりませぬ。

武田氏

ちょっと当たってそれは調べてみますね。

(後日、武田氏より、本の中の茨城県石川の記述は間違い、福島県石川が正しいと訂正がありました。)

亀田氏

まだたくさんあるんですけども、あんまり余計なことを言って、せっかく非常に勉強になったお話に、申し訳ありませんけれど。それほど単純なものではないであろうことを御理解いただいて。

武田氏

まさにね、私が言いたかったことは、そんな単純なものではないだろうということと言いたかったんですね。だから、そういうまさに御批判いただきましたけれども、御批判された内容というのが私が訴えたかったことですので、そのあたりを批判されるとちょっと戸惑うところもあるんですが。一方で、高木仁三郎さんところを共感を持っていただけというふうにおっしゃっていただきましたが、この「核論」を出した後の書評を見ますと、ほとんどが高木仁三郎批判は不当であるという、そういう批評がほとんどだったんですよ。だから、おっしゃるように、私は私の年齢から言いますと、高木さんと言うのは確かにリアルタイムで、その活動がわかるところでありますけれども、それについて、私が書いたことに対して、かなりの批判があったということも事実でしてね。ちょっとお伝えしておきたいと思います。

事ほどさように単純なことではないと思うんですよ。おっしゃるとおり私も日本原研の方、随分取材をしました。それで、私、核融合のJT60の開発の方に随分お話を聞いて

たんですが、まさに核融合技術というもので、こうまさに理想のエネルギー源になると、それでこそ新しいこう時代が開けるんだというそういう希望に燃えて非常に倫理的にも尊敬できるような技術者の方とたくさんお会いしたことがあります。それはまさに私の気持ちの中で、取材としても非常に有益だったと思いますし、こんなに自分のことを私益を求めめるのではなくて、一つの天下国家に奉仕するということに燃える方がいるんだなというそういう出会いがあったというのは、その取材はとてもいい経験になったというふうに思うんですが。ただ、そういう方のお話が例えば大衆社会にうまく伝わっているかということ、そうではないと思うんですよね。さらに、そういう人たちの存在が知られていないということもありますけれども、その後の若い科学者たちにとって、ロールモデルになったかということとそうでもないと思うんですよね。そのあたりの、それは何でなのかとか、そういうことをやっぱり考えていかなきゃいけないというふうに思ったんですよ。

おっしゃることはとてもよくわかりますけれども、そのおっしゃる気持ちというのは、なぜこう社会にうまく伝わっていないのか、伝わっているかもしれないよ、御存じの範囲では伝わっているのかもしれないけれども、やはりもう少し広く見渡してみれば、やはり反核運動もあるわけですし、今御質問なされたそういう意見には共感できないと思う方もたくさんいると思うんですよね。そういうような状況がなぜ起きたのかということを考えていくような、そういう姿勢が僕は必要ではないかなというふうに思って書いたのが「核論」なんです。いろいろ至らないところはあります。専門ではないですからね。間違っているところもあると思いますけれども。そういうことではなくて、やはり科学技術のあり方、科学技術を社会がどういうふうに受容すべきか、そういうことを考えようとしたということをやっと御理解いただいた上で、御評価いただきたいなというふうに思うんですけれども。

本間委員

戦争の前段の話幾つか共通点があって、また時間があればゆっくりお話を伺いたいなと思ったんですけれども。話の内容を伺って、前半のはあれですけれども、後半の要するに未知の部分があることを認識し合って、議論を進めていって、かけの部分を減らしていかないとというお話非常にそうあってほしいなと思うんですけれども。私はこの地元でどちらかということとか、明らかな反対派の方なんですけれども、実際にこの地元において、東京電力の方とか、同じ東という字で始まりますけれども、東善作さんみたいな東京電力の方とこう話、具体的に個々に話をするというわけじゃないですけれども、私らとディスカッションをするときに、既知の部分を既知の前提として未知の部分を可動性があるというか、未知の部分と含めて議論できればいいんですけれども、実際に地元で行われていることは、既知の部分の描きかえだったり欺瞞だったりすることが多いわけですね。

例えば今原子力発電所には、その緊急炉心冷却装置というのがついていますけれども、あれはずっと長らくあんなものは使うことはないけれど、一応つけているんだという説明だったわけですね。今でもここではそういうチェルノブイリのような大きな事故は絶対に起こらないんだとか。それは一例ですけれども、それは東京電力だけではなくて、国の方でも実際に被害のデータを試算したけれど、それはまずいものは隠していくとか、その実際に我々がこう建設的にディスカッションをするところで問題になるのは、未知の部分をお互いどう考えるのかということではなくて、わかっている部分を共通の土俵として話が

できないということにある。東京電力の技術者は優秀な人が多いですから、それがわからないとは思えないんですね、私は。例えば廃棄物の問題を将来どうするのかということについて、東京電力の技術者が埋めときゃいいだろうと本当に思っているとは私はどうしても思えないんですけれども。ただ、それ以上の話は出てきませんので、土に埋めとけば多分何千年も何万年も安全だという話にこれから多分なっていくんだと思うんですけれども、地元にいるともうちょっとこう泥臭いところで、いつもけんけんがくがくやっているという感じを持ちながら、今話を聞いていたんですけれども。

武田氏

おっしゃるような問題が多分あるんだと思うんです。それはどうしても避けがたい部分もあると思うんですが、僕はだからできればそういうような状況を乗り越えていってほしいなという気持ちを強く持っているんですね。先ほど個人も重層的な存在だというふうに申しましたが、だから電力会社の人がかわかっていないはずはないであろうというふうにおっしゃいました。確かに、そのとおりなのであれば、電力会社の人も、電力会社の社員としては話せない領域があるかもしれないけれども、例えば電力会社の社員ではなくて、父親としての立場であれば話せることもあるかもしれない、あるいは電力会社の利益あるいは日本の経済とか、そういうことではなくてもっと地球規模のあるべき未来とかね、そういうことを視野に入れるようになってくればやはりこう公開すべき情報とか、伝えなきゃいけない事実とかそういうものというのは出てくると思うんですよ。だから、まさにそういうポジショントークといいますか、自分の一つの共同体に即してすべてを考えるのではなくて、個人というのいろいろな共同体に属する存在であるということを経験した上で、その中で、今語るべきことというのはどういうものなのかということを見つけていってくれるような、そういう方向づけが個人においてあり得るようになれば、それはやっぱり議論がもっとできる方向になっていくんじゃないかと思うんですよね。そういう方向にうまく進んでいってくれないかなというふうに思うんです。

だから、電力会社の社員の方と反対派の市民が向かい合うということではなくて、やはり理想論かもしれないけれども、人間と人間が向かい合うみたいなそういう立場でなぜ話ができないのかという、そういうもどかしさというのを非常に強く僕は感じるんですね。だから、そういう何かうまくいかないかなというふうに思っていて、そういう気持ちも含めて書いた本でもあるんですけれどもね。

まさにそういう問題というのは、共同体の問題と公共社会の問題だと思うんです。公共性のために奉仕するのか、公共性のために奉仕するのかということだと思うんですね。私はハンセン病の隔離医療の話とか満州国の話とかやってきましたけれども、共同体にとって利益になればいい、共同体によかれと思って何かをすることが、いかに失敗していくかということを経験したことは僕は歴史的にずっと追ってきたつもりなんです。そういう一つの共同体の立場でよかれと思って行動することが、実は公共社会にとってよくないということになるんだよという、そういう警鐘を鳴らしたい気持ちでずっと仕事をしてきているんですね。そういう思いがうまく通じて、もう少しポジショントーク、共同体の立場で話すのではなくて、もう少し普遍的な公共性に奉仕するような立場で物を話すような方が増えていってくれば、世の中は変わっていくんじゃないかな。

あるいは僕はジャーナリズムの世界にいますから、ジャーナリズムはそうですね。ジ



ジャーナリズムはそういうのをうまく仲立ちするような、本当に公共に奉仕するようなジャーナリズムになっていけばいいなというふうに思うんですね。いろいろ問題点があって、それがなかなか企業の論理とか、共同体の論理によって外に出ない、それはやっぱり取材してジャーナリストが外に出すべきだと思うんです。それが本当に公共社会のためになるのであれば、それはマスメディア、ジャーナリズムをやるべきだと思いますよね。そういうある種の第三者性というか、公共社会に奉仕できるようなポジションをとるような個々の共同体を乗り越えた第三者的な立場をいかにとれるか、公的な立場をいかにとれるかというのが、これからの社会の課題なんじゃないかなというふうに思っております。

武本委員

原子力のことを話題にすると角が立ちますんで、ちょっと視点を変えて言いたいと思うんですが、私農家なんです。農家に生まれましたというか。子供のころ強力な農薬はいいものだというか、効果が大きいということで、すごく毒性の強い農薬が使われました。それ今は禁止になっているわけですね。原子力も一面では何かみんなわかったみたいなことを言っているけれども、農薬のことを振り返って、一時に比べて作業はすごく楽になってということはあるけれども、それが禁止になって残留毒性とか何かということが問題になっている。そして、その後、恐らく三桁も六桁も少ない量でも環境ホルモンのような働きをするということで、すごく批判されているというか、余り面倒な話をするつもりはないんですが、そういうことをここ二、三十年の間で経験してきた中で原子力問題があるんです。

原子力も原理といいましょうか、それこそレントゲンのX線発見とかから、100年ぐらいの間で、ここまで来たんだけど、結局その効果にだけ目が向いて、先ほど居られたうちに議論したかったんですが、科学者が効率だとか効果だとかを注目し過ぎて、未知の部分に対してほとんど目をつむってきた結果がこういうことになっている。少なくとも農薬においてでは、そういうことが言えると思うんです。それは、では大衆の責任になるかと言えば、そんなことはなくて、その責任の大半は研究者というか、そういうことにかかわった側にあると私は思います。それが今言ったような領域ばかりじゃなくて、ひょっとしたら20世紀の文明のあり方みたいなところがそういう体質を持っていたんじゃないか、その一つの側面が原子力じゃないかみたいな感じがしています。その原子力のマイナス側面みたいなものが、ここ数年次々といろんなことが起きているような気がしてならないんですね。

そういう中で、現実に地元では原発があって、それに対していろんな議論がある。そういうその非常に私らのせいでも原子力があるわけじゃないのに、こんな無理難題を押しつけられてという思いがありますが、原子力を言うと角が立つと言いながら言いましたが、どうもどこまで知って、どういう部分を利用してというような考え方に、誤りというか、不完全さがあって、そのマイナス側面が最近顕在化してきている。それに対する克服の手法みたいなものが、最後の2枚とか3枚にあったと思うんですが、制度としては情報公開とか、説明責任とかですね、そういうことを果たして軍事技術で大きくなった原子力が本当にやれるのかとかというか、それがためされているような気がしまして、二つのことを言いたかったんですが、こういう全体状況を、私の全体状況に対する誤りというか、軌道修正をしてもらえればと思って発言しました。

武田氏

確かに軍事技術から始まってということに厄介ですよ。核燃料の輸送なんかも、情報公開してしまったらテロリストに狙われるのではないかみたいなことで、情報公開しないと、安全を守るために情報公開できないんだという、そういう論理が成り立ってしまうのが、核の厄介なところだと思うんです。いろいろいろんな方向で、そういう厄介さというものがあって、それがさらにモザイク状に絡み合っている、そういう非常に複雑な問題系が原子力という問題だと思うんですね。でも、やっぱりそれを書かないといけないんですよ、これはやっぱり多元連立方程式みたいな非常に厄介なもんだと思うんですけれども、やっぱりこれは我々がこれから21世紀生きていく上では、この原子力の問題というのを解いていかなきゃいけないと思うんです。それが、どういう形の受容になるか、どういう形の拒絶になるか、それはもうわかりませんが、何らかの形で、原子力に対する姿勢というものにおいて合意点を見つけていくような、そういう建設的な方向性を持つようなことになっていかないと、やっぱりいけないと思うんですよ。現状ではそうではないんじゃないかという気持ちがとても強くありまして、非常にもどかしく感じるというのが私の個人的な実感なんですね。

先ほど農薬の話をなさいました。農薬がそんなに有害であるなんていうのはわからなかった。でも、専門家だったらわかったはずなから、それは専門家の責任であると、大衆は責任がないんだというふうにおっしゃいました。そういうような議論の仕方でも議論できる面もあると思います。ただ、一方では先ほど申しましたように、科学技術に対する無垢な信頼みたいなものが大衆社会の方にもある程度あったんじゃないかというふうに、そういうふうに見る姿勢というのは必要だと思うんですよ。こんないいと言われている、雑草がこんなにとれて労働力が非常に少なくて済む、こんないいものだというふうに言われているんだけど、本当にそうなのかというふうに思うような、例えば実験はできないですよ。普通の農家の人にはもちろん科学的な実験はできない。外国の学識の本も読むこともできないかもしれない。ただ、そうであってもやはり科学技術というものは、わからない領域はあるんだというふうに、そこは押さえておくことはできたと思うんですよ。そういうある種の慎重さを持って科学技術に接するようなことができているれば、少し歴史の軌道が変わっていた可能性もあったと思うんですよ。もちろんだから、その責任をとれとかそんなことを言うつもりはないんですけれども、やはり自分たちのうちなる科学技術信仰みたいなもの、そういうものをもう一回、省みってみるという視点は、反対するにしろ、賛成するにしろ必要だとは思うんですよ。

まさに未知性みたいなものを視野に入れた上で、制度設計をしていくような方向づけを社会に対してしていく、これは民主主義の時代ですから、できないはずはないと思うんですよ。いろんな阻害要因があって、なかなか皆さんの思うとおりには進んでいないんだけど、それは民主主義が悪いのではなくて、阻害要因のあり方、あるいは阻害要因いろいろ入り組んだ形であってなかなか解決できないんだけど、そういうものがあって、なかなか皆さんの思い通りにならないと思うんですよ。そういうものをちゃんと、問題点をクリアにして考えていくことによって、科学技術というものが常に未知性があるということ的前提とした上で、制度設計ができる社会にしていくようなそういう方向づけを少しずつでもしていきたいなというふうに私は思っています。

農薬も実際に悪いということがわかった時点で速やかにとめるべきですよね。ところが、でも多分惰性というか、なかなかとめられなくて、その間にどんどん被害がふえていったりとか、後の歴史に影響を残してしまったようなことがあると思います。被害をいかに最少化できるような社会制度をつくっておくかという、そういうことってというのは、やっぱり問われているんじゃないんでしょうかね。どうしてもわからないから間違える可能性はある、やっぱりリスクはあると思うんです。リスクを最少化するために何が必要かという、そういう戦略的な考え方っていうのをしていくべきなんじゃないかなというふうに、僕は個人的には思いますけれども、いかがでしょうか。

川口委員

質問というより武本さんのような言い方になるのかもしれないですけども、一つにやっぱり正力オーナーの件のマスコミの報道というのが、あれが事実そうだったか、本当にそれだけのために利用したかわかんないんですけど、今現在でもマスコミの報道の影響力というのは物すごく大きいなと、本当にこんな小さいことでもマスコミがばっと取り上げれば、すごく大きくなる、そういうことはやっぱり一つのマスコミの暴力というか、ちょっと恐いなという面でマスコミをうまく利用すれば、何かそっちが延びられるみたいな、それは恐いなと非常に聞いていて感じました。

もう一点、原子力に関してなんですけれど、私は原子力というのは推進の立場です。自分の思うには、やっぱり確かに今ある人に言わせれば、核のごみがたまると、でも、たまったごみはやっぱり管理していけば自分としてはいいんじゃないかと、それこそさっきの話じゃないけれど、ひょっとしたら、そのごみが有効になるかもしれない。一番の不幸は我々の子孫のためにエネルギーを残せないのが一番困るんじゃないかなと思っています。そのためにやっぱり核のリサイクルというのもやっぱり自分は必要だと思います。特に日本において、全く資源のない国がリサイクルすることによって、資源を生み出すことができる、これはやっぱりやっていかなければだめなんじゃないかなと自分では思っています。

あと実際問題、リサイクルというのはやっぱりお金がかかることだと思っています。それが何で今になって高くなるからどうのこうのという議論になるのかなというのがちょっとわかりません。そんなところです。

武田氏

憲法9条があるから許されている面ってありますよね、再処理って、恐らくね。韓国が今回ああいうふうに視察が入ったりするのはやっぱり憲法9条的なものが、しっかりしたものがないということがあつた種国際社会の中で許されなかったところがありますよね。憲法問題とか国際政治関係の中で、再処理の問題というのはあるんですよね。国連の常任理事国入りは今取りざたされていますけれども、今常任理事国に入るときに、やっぱり9条を変えてくれというふうにアメリカは言っているわけですよね。このときに再処理がどうなっていくとか、いろんなところで一つこうつくと、いろんなところに影響が出てしまうのが現状でありまして、そういう複雑な問題系の中で原子力があるんだというふうな認識を持たないと、やっぱり原子力に対する議論というのが、どうしても一面的になってしまうおそれがあると思うんですよ。

僕も全然政治に疎いので余り偉そうなことは全然言えませんけれども、皆さんが相手にしている問題というのは非常に大きな問題であり、非常に入り組んだ問題であるというこ

とをやっぱり真摯に認識した上で、お話していったほしいなというふうには個人的には思っています。

佐藤委員

ちょっとピントが外れているのかもしれないんですけども、最後の3コマぐらいを見て、日本人だからいいじゃないかということであまくいくかどうかというのは、なかなか難しい問題だと思うし、そういう方向に今までずっと高度経済成長とともになっていないんじゃないかという感じがするんですよ。例えば食品業界、例えばパン、やわらかくて腐らなくて、いつまでも新鮮な形で一つのメーカーが日本全土を支配するような形、そこには徹底的な添加物が入っている。そういうのを応援しているのは国家なわけですよ。こういうのを使っていいからと言って。そういうのに痛めつけられているのは、残念ながら消費者なんだけれども、消費者というのはなかなか抵抗しても、それには対抗できない。では、ここに書いてあるような形でバランスよくあまくいくのかということそうはならない。それはやっぱり、高度経済成長の中でだんだん発展すると同時に、だんだん一つの企業体が大きくなっていく。大きくなっていくことによって、ますます集中していく。集中していくには、どうしたらいいかということで、ますます小さいものを吸収したりしながら、自分の都合のいい形でいくという、そういうのというのは、食品業界でいけば、たまたまパンの話を出したけれど、漬物物なんかだあってそうなんです。漬物物とそれからハムと練り物と、それからパンなんかは横綱だとかと言われているんだけれども、そういうこともあるでしょうし、そういうのと同じように原子力ってある一面では最初に結論があって、その過程の議論がないというのは高木先生も盛んに言っているけれども、確かにそういうことがあるからいろんな不祥事があったり、いろんな問題が起きているんだと思うんです。そういうことと、今ここでいろいろ言われていることとは、なかなか一致しないんじゃないか、今後とも一致していかないんじゃないかという感じがするし、していけばいいということはあったとしても、ある意味では経済原則から見て、そういうことというのはあり得ないんじゃないかという感じが今していたんですけども。

武田氏

高木仁三郎の話が出ましたが、初めがあって間がないというふうにおっしゃいましたよね。高木仁三郎がそういうふうには批判しているというふうにおっしゃいましたけれども、高木さんもそうでしょう。高木仁三郎氏自身も中がない部分があるんですよ。そのことを「核論」では書いたんですが、いわゆる科学の論理が運動の論理に変わってしまっている段階で、いわゆる中抜きというか、合理的な説明の仕方とは飛躍したような論理転換をしまっている部分があるということを指摘したんですけども、事ほどさように、批評というのは厳しいところがありまして、やっぱり目につく、人のあらというのは自分にある場合が多いんですよ。私もだから評論の仕事をしていまして、常にそれは自戒を込めて自分に常に言おうと思うんですけども、人のことを批判するときには、自分にその問題点がないのかということや常に省みる視点がないと、批評というのが建設的なものになっていかないことがあると思うんです。それはそちらがそうだとやっているわけじゃないんですよ、全然一般論として言っているし、あるいは自分の身に引きつけて物事を言いたいんですけども。

高木さんの話から言っていくと、それは僕は科学的思考力の弱さだと思うんですよ。高

木さんは核科学の専門家であって、もちろん一流の科学者だったと思うんですが、その一流の科学者である高木さんですら、そういう運動のために、自分の反核運動を実現するために、科学性を放棄するというそういうことがあり得たという、そういう事実を持って、やっぱり高木さんですらそうだったということを、我々がいかに科学的な思考というものを徹底する力、意思に欠けているのかと自分を省みる。高木さんの思考を踏まえて、そういう省みる視点を持つべきだというのが私の視点なんです。

佐藤委員

そういう風には思えない。高木さんも現場の経験があってそう言っているわけだから、客観的に見てどうのこうのというのはおかしいと思う。

武田氏

客観的に見てどうのこうのの方がおかしいというのはどういう意味ですか。

佐藤委員

言葉の通りの意味だが、着地点を見いだすというようなことを言っているけれども着地点なんてものはなかなかないじゃないか、だんだんひどくなっているのではということをお前は言いたい。

武田氏

なかなかひどくなっているというのが、着地点がないということではないですよ。だんだんひどくなっているからと言って、着地点がないとは言い切れませんよ。

佐藤委員。

客観的に見てどうということではなく、何をどう変えていったらいいのか明確に説明してください。

武田氏

ですから明確にはというふうにおっしゃいましたけれども、例えばその御指摘になった後半3枚のあれですね。パワーポイントのことですよ。まさにこれが私がこういうふうになってくれればよいというふうにしたつもりなんです。だから、共同性に固着しないで、公共性の次元というのをいかに確立していくかということをおねおねお伝えしたつもりではあるんですけども。どうですか、ほかの方。

渡辺(五)委員

話を割って入るわけじゃないんですけども、私らがこうこれまで経験してきた、これは原発だけでなく、例えば見たり聞いたりするので言うと、例えば行政の立場で言うと、公共事業というと明らかにもうこれは、明らかではないんでしょうけれど、私が今まで見た中で一番これはお粗末だったのは、あそこに米山があるんですよ。今もわかりますかね。米山林道をつくらうと言ってこれはもう20年、30年ぐらい前、米山の中腹を削った、私青年のころでしたが、反対運動も何もできませんでしたが、これは遠くから見ても、あそこに道をつくったって米山がおかしくなるだけだと思っていた。行政は余り反対もなかったんでしょから、途中まで道ができました。見てからわかってやめたんですね。やめたんだけど、今もコンクリートで崩れないようにみんな道路を補修しつつ、大きな石は崩れたりしているというものになっている。

やっぱり公共事業を考えてみると一たん方針が決まると、ほとんどそれが止まることは最近なってきましたけれども、議論がないままいくと思うんですね。残念ながらこの原子

力行政も極めて高度で巨大な技術ということでほとんど柏崎議会もそうだったと思うんですね。出発のころこれは面倒なんだからとにかく知識はその程度だったのかもしれないですね。地元が潤うということで出発して、だんだんこう議論がふさがってきたら、いいとか悪いとかいうのが出てくる。ただ、進めるということ事は止まっていないわけですね。そこで、今私はこう先生のこれを見ていて民主主義というところにかぎ括弧がしてあるんですね。何でもかぎ括弧なのかなと、ここがポイントなのかなと思ったりするんですが。現実に物事を進めていくと金がおりるからしょうがないとか、あるいはエネルギーがなくなるかもしれない、それとじゃあ自分たちの命があるいは環境がどうなるんだと、この分岐点に今いるときにやっぱり切羽詰まった問題というのが出てくるんだろうというふうな、あるいは出ざるを得ないのが今だと。私もそう言うとなんとなく評論家的になっちゃって大変申しわけないんですが、余り評論家的にはなりたくないなと思いつつですね、やはりそこにもう少しの解決、これはこの地域のかえってのある意味ではそういう解決点の一つになるんだかもしれませんが、なかなかそこに力が出ないというんですかね。お互いの話し合いの中で、到達ができないというところにもどかしさが。全国的にこう見たりして、そういうところが一つのこう何というんですか、交わりがある、あるいはそういう行政に進んでいるとか、運動的にそういうのをこう経験されたり、あるいは現実的に見たりしているようなところが、あるいは参考になるようなお話というのは...

武田氏

でも、だから、こういう会ができたこと事体で、もう随分進歩じゃないでしょうかね。僕は最初、ここで話をする前にこの会の成り立ち云々の話を少し予備知識として聞かせていただいたんですけども、いろいろ議論があって、随分熱心な御議論をされているようですけれども、その議論ができるようになったことだけでも僕は随分よくなったというふうに思うんですね。だから、悪くなる一方ではないかというふうに言ってしまうことでなくしてしまう可能性の大きさというのは、やっぱり考えるべきじゃないかなというふうに思うんですよ。評論家的に何か言ってもしょうがないというふうにおっしゃられたのは、指摘されたのはまさにそのとおりなんです。私は評論家的にかかわり合わない場面としては、僕は今ジャーナリスト教育というのをやっているんですね。先ほど話に出ましたけれども、情報公開云々と言ってもなかなか情報が出てこないという状況があるという、それは現状認識としてそのとおりだと思います。さらに原子力特有のある種の、社会の安全のために情報公開をするべきでないみたいなそういう論理もあって、なかなかもう原子力というのはその情報公開という、そういう原則になじまないところがあるというのは事実だと思うんですが、情報公開すべき部分はあって、そこも情報公開しないわけですよ。それを出してくるというのは、こちらからある種のプッシュというか、能動的にその情報を出すためにかかわっていくような立場の職業の人が必要だと思うんですよ。

それは僕はジャーナリストだと思うんですよね。やっぱり普通の市民の方がなかなか企業の内側に入ったりとか、国家政策の内側に入って話を聞くというのはなかなか難しい面があるので、やっぱりこうジャーナリズムというのは一つそういう突破口になる、突破口を切り開くための役割を果たすべきだと思っておりまして、そういうことができるジャーナリストをつくるというのが私の最近の仕事では、一番ウエートの高いところなんです。これはまさに公共性に奉仕できるジャーナリストですよ。今までのジャーナリズムは決

してそうではなくて、先ほどもマスコミの影響力が大きいというふうにおっしゃいましたけれども、マスメディアというのはどうも風見鶏的というか、この世の中の一つの流れの中で、その方向にしか物事を報じられなかった面があったと思います。あるいはマスコミも一つの企業であったりとか、NHKのように組織であったりとかしますから、その組織を防衛したりとか企業の利益を大きくするために働いてしまったりとか、そういうことがあると思うんですよ。でも、それはジャーナリズムのあるべき姿ではなくて、僕はやっぱりジャーナリズムというのは、公共性の奉仕すべきだと思うんです。きれいごとかもしれませんが、今その個々の共同体の利益とか、個々の共同体の被害とかそういうことを乗り越えて今伝えるべきことは何かとかね、今告発すべきことは何かとか、そういうことを考える方向に少しでも進めるようなジャーナリストをつくるというのが、私の今のやりがいのある仕事なんですね。

こういうこともやっぱり何年かかるか確かにわかりませんが、僕はよく冗談で30年計画とか言っているんですけども、少しずつでもそういうポジショントークをしないそれぞれの立場の人を横断してね、それぞれの立場を横断して公共的な利益になる方向性を社会に持たせるための働きをするような、そういうものをつくっていくという試みをしていけば、何か変わっていくんじゃないかなというふうに思うんです。この会もまさにそういう方向にあるのではないかと私は思いたいところがありまして、皆さんには頑張ってほしいなというふうに思っているんです。そういう気持ちを込めて、今日は話したつもりではあるんですけどね。

新野議長

ありがとうございました。まだ多分このままいくとずっと続くような議論があると思うんですが、最初にお願ひしたとおり、残された時間もなくなりましたので、ここで閉じさせていただきますと思います。このお聞きしたことも、私たち委員の立場も合意点が簡単には見つからないということは最初からわかっているつもりですが、なかなかいいことを何か明日に向かって一生懸命やっているという形の会なんですけれど、先生に期待されているような、何か要するに後戻りだけは多分しないというのは皆さん共通点だろうと思いますので、また、今日のいろいろ教えていただいた、お聞かせいただいたことを、委員同士議論させていただいて何かいい方向につなげていきたいと思っています。

今日は拡大の会ですので、遅くまで一般の傍聴の方にもお入りいただきまして本当にありがとうございました。私たち何か毎回テーマがあるような議論で、最後はあらとかと終わることもありますし、気の許せないとても充実した時間を過ごしております。今回皆さんにこう一般公開するに当たってもちょっと私どもも「視点」という広報誌を持っているんですが、2カ月に一度しか発行できませんで、なかなかPRができませんのを市内とかの各新聞社の方とかの御協力を得まして、本当に時間のない広報で申しわけなかったんですが、そういう協力もまたいただいて成立させていただきましたことにお礼を、ちょっと最後ですが申し上げさせていただいて、これで会を閉じさせていただきますと思います。いつもながらオブザーバーの方にも遅くまでありがとうございました。

また、ずっとこんな会を続けてますけれども、何かいい点、いい論点を見出したいなと思って、全委員は努力しておりますので、また見守っていただければと思います。各委員の近くにいらっしゃる方は、それぞれ思っていることをもし伝えたいことがあれば、委員

を呼びとめていろんな御意見を聞かせていただければありがたいと思います。今日は本当に遅くまでありがとうございました。

事務局

どうも御苦労さまでした。雨で足元が悪いかと思いますが、車等運転気をつけてお帰りください。どうも御苦労さまでございました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21:00 閉会・・・・・・・・・・・・・・・・